

第51回九州地区大学一般教育研究協議会議事録

<https://doi.org/10.15017/20603>

出版情報：九州地区大学一般教育研究協議会議事録. 51, 2003-09-10. 九州地区大学一般教育研究会
バージョン：
権利関係：

《 発表：保健体育部会 》

RHÖNRADTURNEN を健康・運動系実技に取り入れて

琉球大学 本村 三男

1. はじめに

戦時中に航空兵の訓練にも使われたラートは、80年代後半スポーツとして再登場し、89年には日本ラート協会の設立をみた。普及に努める協会の講習会に参加すること数度、実体験から運動要素に特異性があり、回転中の心身への持続的刺激はからだ気付きを促し、既成スポーツにならない未知の体験（三次元運動）が可能と捉え、学生にもその機会を与えるべく大学の大綱化に伴う94年のカリキュラム改革時に健康・運動系実技の一つのコースとして開設し今日に至っている。

近年、ニュースポーツとして他大学でも取り入れられつつあり、日本ラート協会の示すラート導入先は25大学にも上っている。さらに広がることを期待し、この機にラートコースの授業を公開することにした。

2. 授業について

本学大学教育センター発行の共通教育等科目授業計画書には以下のように示されている。

科目番号 健13-A06 科目名 健康・運動実技（ラート） 単位 1単位 開設学期 前・後
担当教官（教官室） 本村 三男 （保健体育教官棟211号室）
教科書 使用しない
参考図書 適宜参考資料を配付する

授業の主旨

ドイツ生まれのラートは、ヨーロッパでは広く普及しているが、わが国では日が浅く、1989年にラート協会が発足したばかりである。平衡感覚や位置感覚を動員しながら自分の身体を駆使して回転をコントロールするため、からだ気付きを促しつつ、三次元空間の運動が体験できる、まさにこれからのスポーツであり、性・年齢を問わず、視力障害者にも可能なスポーツでとして注目されている。

授業ではラート協会技術検定章の5級、4級、3級の合格を目標にしつつ、斜転や二人組みでのパフォーマンスにも挑戦する。

成績評価の方法

出席状況に加えて向上への意欲、安全への配慮、到達度等を見る。

注意事項等（履修条件等含む）

学校用体育館シューズに厚手の靴下を用意すること。

大学が実施する「定期健康診断」を受診すること。

大学教育研究災害傷害保険等に加入していることが望ましい。

授業予定

1. オリエンテーション、運動歴や授業への期待等調査
2. ラート遊び
3. 側方回転、前後回転
4. SPDL 前後回転、HANG-HANG、BRIDGE
5. 5級の通し
6. 4級の練習と斜転、二人組回転〔4回〕
7. 3級の練習と斜転、二人組回転〔4回〕
8. 総合練習
9. 到達度調査

3. 日本ラート協会技術検定章の内容について（日本ラート協会技術委員会 1998.7.1 より）

直転5級

1. 側方回転
2. 後方回転
(内向きたて姿勢)
3. シュピンデル後方回転
4. 側方回転 (手：リンググリップ)
(外向きたて姿勢)
5. シュピンデル後方回転
6. ぶらさがり後方回転 (手：リンググリップ)
(内向きたて姿勢)
7. 前方回転
8. ブリッジ前方回転 (手：バーグリップ後方)

着地技：横姿勢、振り跳び

直転4級

1. 後方回転～側方回転～前方回転
2. 前方回転～両手を離す～ブリッジ前方回転 (手：バーグリップ後方)
(横姿勢、回転方向の足を外す)
3. 側方回転・開脚 (足：開脚バー)～側方回転・クロス開脚 (足：開脚バー)
4. 側方回転 (足：ベルト足に揃える)
(外向き縦姿勢)

5. 後方回転・後方開脚（手：バングリップを順手、足：後方の開脚バー）
～後方回転・前方開脚（足：前方開脚バー）
 6. ぶらさがり後方回転（手：リンググリップ）
（後方のバングリップを押しながら、外向き縦姿勢）
 7. シュピンデルブリッジ後方回転
（1/2 ひねりながら前方開脚）
 8. ブリッジ前方回転・前方開脚（手：バングリップ後方、足：前方の開脚バー）
～ブリッジ前方回転（足：ベルト足に揃える）
- 着地技：横姿勢、振り跳び

直転3級

1. 側方回転・片手（手：回転方向のバングリップ）
 2. シュピンデル前方回転～1/1 ひねり～シュピンデル後方回転
（外向き縦姿勢）
 3. ブリッジ後方回転（手：バングリップ後方）～両手を離す～後方回転
 4. ブリッジ後方回転（手：リンググリップ）
（前方の足を外し前方の開脚バーへ、内向き縦姿勢）
 5. フリーフライ前方回転・前方開脚（足：前方の開脚バー）
～1/2 ひねり（手：リンググリップ）～後方回転・前方開脚
（1/2 ひねり）
 6. ブリッジ前方回転・前方開脚（手：バングリップ後方、足：前方の開脚バー）
～ブリッジ前方回転・片足
（外向き縦姿勢）
 7. 後方回転・後方開脚・片手（手：バングリップを順手、足：後方の開脚バー）
～後方回転・前方開脚・片手（足：前方の開脚バー）
（1/2 ひねり、リンググリップを握る）
 8. 屈膝前方回転～開脚バー跳び越し～ステップに立つ
- 着地技：横姿勢、振り跳び

4. 授業登録者について

ラートは身長に応じた適正サイズ（身長+35～40cm）があるため、5cm刻みで大きさが異なり、台数にも限りがあるなど受講者数が制約される。1台当たりの人数は補助を付ける意味でも2人が理想的であるが、受講希望者数と回転効率等から3人まで受け付けている（現有台数は18台）。

94年度後学期から02年度前学期に至る授業登録者は426人（男211、女215）、ほぼ男女同数である。また、年次別にみると3、4年次の高学年学生の登録者が他コースよりも比較的によく、ラートへの興味を持ち続けていたことをうかがわせている。

授業登録者の年次別、男女別内訳

		1年次		2年次		3年次		4年次		学期 別 合計	年度 別 合計
		男	女	男	女	男	女	男	女		
1994年 度	前期										11
	後期	2	2	4		1	1	1		11	
1995年 度	前期	1	1	6	4		2	1	1	16	25
	後期	2	4	2		1				9	
1996年 度	前期	5	3	3	6	6			3	26	47
	後期	8	6		3	3		1		21	
1997年 度	前期	4	3	2	10	8	2	2		31	59
	後期	7	15	1	1	1	3			28	
1998年 度	前期	4	7	3	2	3			4	23	53
	後期	6	7	10	4		1	1	1	30	
1999年 度	前期	9	8	2	5	2			5	31	62
	後期	12	10	1			4	1	3	31	
2000年 度	前期	15	10	1	8		1	1		36	68
	後期	17	10			1			4	32	
2001年 度	前期	13	4	1	7			2	1	28	60
	後期	14	7	1	7	1			2	32	
2002年 度	前期	9	15	3	3	4	5	2		41	41
	後期										
男女別合計		128	112	40	60	31	19	12	24	426	
年次別合計		240		100		50		36			426

全登録者数	男子211人	女子215人	合計426人
1年次	128人	112人	240人
2年次	40人	60人	100人
3年次	31人	19人	50人
4年次	12人	24人	36人

5. 授業終了時のアンケート結果から

授業内容について、ラートについて、授業に対する期待とその結果についての授業終了時の調査結果から、検定級への挑戦を善しとし、実際にやってみたラートは思っていたより難しくきつかったが楽しかった。そして授業当初の期待とその結果については概ね期待通りであったと応えている。

授業終了時のアンケート結果から (1996年度前学期～2002年度前学期調査)

1 授業内容について (男130人 女155人)

- ア 検定級の技だけにしてより上の級を目指す (♂32.31% ♀41.29%)
- イ 検定級の技に斜転を加える (♂46.92% ♀37.42%)
- ウ 検定級は初級程度にして斜転やその他の技を加える (♂14.62% ♀11.61%)
- エ その他 (♂6.15% ♀9.68%)

2 ラートについて (男141人 女168人)

- | | | | |
|---|-----------------------------------|----------------------------|------------------------------|
| ア | 思っていたより難しかった
(♂63.83% ♀51.19%) | どちらとも
(♂21.28% ♀33.33%) | やさしかった
(♂14.89% ♀15.48%) |
| イ | 思っていたよりこわかった
(♂29.09% ♀42.26%) | どちらとも
(♂29.79% ♀18.45%) | こわくなかった
(♂41.13% ♀39.29%) |
| ウ | 思っていたよりきつかった
(♂51.06% ♀44.64%) | どちらとも
(♂34.04% ♀43.45%) | 楽だった
(♂14.90% ♀11.91%) |
| エ | 思っていたより楽しかった
(♂94.33% ♀92.86%) | どちらとも
(♂4.96% ♀5.95%) | 楽しくなかった
(♂0.71% ♀1.19%) |

3 授業に対する期待とその結果について (男141人 女168人)

- | | | | | | |
|---|-----------|-------------------------------|------------------------------|---------------------------------|----------------------------------|
| ア | 技術を向上させたい | かなり
(♂46.10%)
(♀41.67%) | 一応
(♂48.94%)
(♀50.00%) | どちらとも
(♂4.96%)
(♀8.33%) | しなかった
(♂)
(♀) |
| イ | 体力をつけたい | かなり
(♂21.28%)
(♀24.40%) | 一応
(♂40.42%)
(♀48.81%) | どちらとも
(♂29.79%)
(♀24.40%) | つかなかった
(♂8.51%)
(♀2.38%) |
| ウ | 友達をつくりたい | かなり
(♂21.99%)
(♀29.17%) | 一応
(♂52.48%)
(♀54.46%) | どちらとも
(♂23.40%)
(♀13.69%) | つくれなかった
(♂2.13%)
(♀2.38%) |
| エ | 精一杯動きたい | かなり
(♂39.72%)
(♀48.21%) | 一応
(♂42.55%)
(♀38.69%) | どちらとも
(♂14.18%)
(♀11.31%) | ものたりなかった
(♂3.55%)
(♀1.79%) |
| オ | 楽しくやりたい | かなり
(♂73.76%)
(♀80.95%) | 一応
(♂24.11%)
(♀17.26%) | どちらとも
(♂2.13%)
(♀1.79%) | つまらなかった
(♂)
(♀) |
| カ | 知識の広がり | かなり
(♂36.17%)
(♀35.71%) | 一応
(♂48.23%)
(♀52.38%) | どちらとも
(♂12.76%)
(♀11.91%) | なかった
(♂2.84%)
(♀) |

6. 学生の授業評価について

本学大学教育センター実施の学生による授業評価で設問項目が追加され一定になった 98 年度前学期から 02 年度前学期までの評価内容の中から直接授業に関わる項目について「そう思う」「強くそう思う」にマークされた数は以下の通りである（マークシート回収 196 枚）。

- 心に残る良い授業であった・・・180 人（91.84%）
- 「大学で学んでいる」と実感のわく授業であった・・・151 人（77.94%）
- この授業を受けて学問に対する興味が増した・・・119 人（60.71%）
- この授業について総合的に判断して満足している・・・183 人（93.37%）

また、特によかった点、印象に残った点についての自由記述欄に特記されたものについて、その一部を記す。

- … 初めて回ったとき感動した。
- … 逆さになったときの感覚が印象に残った。
- … かなり未知の世界を体験できた。
- … 体を動かしていると実感した。
- … 練習するだけうまくなるのが面白かった。
- … 他の授業では一つ出来ないことがあるとやる気をなくすが、ラートは失敗しても全然やる気を失うことはなかった。
- … この授業はいっぱい人に勧めている。ラートは面白い。心の葛藤があって面白いのだ。
- … またラートがしたい。最高に楽しい授業でした。

7. おわりに

授業開設時 7 台であったラートも今では 18 台（180～220cm）になり、学生の希望にかなり応えられるようになったが、それでも台数との関係で断わる場合が多々あり、残念である。

授業では 1 台につき 2～3 名の学生が検定級に挑戦するかたちで互いに協力しながらそれぞれのペースで進めており、これまでに 5 級に 20 名、4 級に 52 名、そして 3 級に 52 名の合格者を出している。尚、これには視力障害者 1 級の学生（特別クラス）が 93 年に 5 級、4 級に合格したのも含まれている。

キャンパス内の自然体験－授業実践とその成果から－

琉球大学（非常勤講師） 張本 文昭

1. 背景

平成8年7月、第15期中央教育審議会の第一次答申において文部省（現：文部科学省）は、これからの教育の在り方として、「生きる力」を育成することが重要であると指摘した。同答申では、「生きる力」の育成方策の一つとして、青少年の生活体験、自然体験の機会の増加を求めている。また時を同じくして「青少年の野外教育の充実について」（報告）がまとめられ、野外教育の概念、教育的意義、現状と課題などについて報告された。さらに近年の総合的な学習の充実など、青少年教育においては、自然体験や野外教育に対する関心や期待が高まりつつあると言えよう。

一方、琉球大学は亜熱帯気候に属する沖縄本島に位置し、本土とは異なる自然に囲まれたキャンパスを有している。また共通教育健康運動系科目として開設されている「キャンプ」の受講学生のうち、約60～70%が本土出身であり、学生の自然に対する興味は高い。

このような背景から、担当教官である筆者は授業全体のテーマとして、「キャンパス内の自然を活用し、自然に目を向ける」ことを設定し、授業を計画、実践している。本資料は、琉球大学における共通教育健康運動系科目「キャンプ」の授業内容の詳細を報告すると共に、学生の反応などを紹介するものである。

2. 授業内容

以下に授業内容とその実施場所、テーマを示す。

- | | | | |
|---|------------|-----------|--|
| 1 | オリエンテーション | 陸上競技場周辺 | 授業目標の共有化
(自己紹介ゲーム、教官の自己紹介、コースオリエンテーション、授業目標、など) |
| 2 | イニシアティブゲーム | 陸上競技場周辺 | 学生間の関係作り
(6～8名編成のグループで課題解決型のゲームをすすめる) |
| 3 | 自然を感じるゲーム | 陸上競技場周辺 | 学生間の関係作り、自然を感じる
(全員および3～4名編成のグループでワイズ型のゲームをすすめる) |
| 4 | 簡単な野草料理 | キャンパス中央 | 自然に目を向ける
(野草を採集し、天ぷら・スープを調理) |
| 5 | 野外における危険生物 | 室内 | 学内・沖縄における危険生物の認識
(講義とビデオ視聴により、危険生物への認識を深め、予防法や対処法を学ぶ) |
| 6 | 学内探索と俳句作り | キャンパス全域 | 自然との対話
(1人でキャンパス内を散策し、俳句を作って戻ってくる) |
| 7 | 句会 | 室内 | 体験の共有化
(受講者全員の俳句を鑑賞する) |
| 8 | コンパスワークと読図 | キャンパス内の森林 | 土地と方向感覚、距離感覚 |

(歩数で距離感覚をつかむコンパスで方向を読む、ミニオリエンテーリング)

- | | | | |
|----|--|------------|--------------|
| 9 | テント設営・撤収の方法とロープワーク | 陸上競技場周辺 | キャンプ技術 |
| | (テントの種類別の設営・撤収と基本的なロープワーク) | | |
| 10 | 草木染め&貝殻細工 | キャンパス全域、学外 | 自然を生かした生活と芸術 |
| | (フクギその他樹木からTシャツなどを染める、貝殻、サンゴ、砂、流木などでクラフトをする) | | |
| 11 | 野外料理の計画 | 室内 | キャンプ技術 |
| | (受講者のレポートを参考に、グループ毎に野外料理の計画を立てる) | | |
| 12 | 野外料理 | キャンパス全域 | キャンプ技術 |
| | (かまどの設置、薪拾い、調理、他のグループの試食) | | |
| 13 | 授業のふりかえり会 | 室内 | 体験の共有化と授業評価 |

3. 授業のふりかえり会

授業の最終回に、授業全体のふりかえり会を実施した。全体的にグループワークが多い授業の中で、他者がどのような体験をしていたか、どのような発見や気づきを得ていたか、などについて学生同士で共有化と、価値観の多様性の認識を図ることを目的としている。また学生からの自由な意見や感想を得ることができることから、授業評価の一環としての位置づけも兼ねている。

5~6名にグループ編成し、ふりかえり会をすすめた。各学生にマジック、A4用紙10枚、A4ボード1枚を配布した。教官が発する1つの質問に対する答えやコメントを1枚の用紙に記入し、グループ内で見せ合い、意見交換するものであった。

以下に、各質問と、代表的な意見やコメントを列挙する。

3. 1. この授業で一番楽しかったこと

多かった内容は、イニシアティブゲーム、コンパスワークと読図、野外料理、であった。イニシアティブゲームは、授業の前半に学生同士のコミュニケーションが活発になったことで、授業全体への期待感が増したことが評価されていた。コンパスワークと読図は、森林内でコンパスと地図を用いてポイントを捜す行為が楽しかった、という意見が多かった。野外料理は自分たちで計画した料理を、実際に学内に自生している植物を用いて調理したことが評価されていた。

3. 2. この授業で一番いやだったこと

暑かったこと、蚊が多かったこと、集合場所がしばしば変更になったこと、が多くみられた。当日の天候により集合場所を変更することがあったが、事後は学生への通知方法を検討しなければならない。

3. 3. この授業を通して、自然について新たな発見をしたことや知ったこと

琉球大学には自然が多い、食用可能な草はいっぱいある、自分は動植物の名前を知らない、植物で染め物ができること、危険な生物が多いこと、夏でも森の中は涼しいこと、などが挙げられた。身近なキャンパスの自然について新たな発見があったことは、授業の成果として評価できるであろう。

3. 4. この授業を通して、自然について感じたこと、思ったこと

ゆったり時間が過ぎる、のんびり、いいなあって感じ、気持ちいい、すごいなあ、暑い、飽きない、ステキ、人間は勝てない、強い、偉大、癒される、感謝、などが挙げられた。全体的に素朴

な印象を感じたようであるが、自然に対する認識の幅が広がったと考えられる。

3. 5. この授業に何を期待していて、その満足度は何%か

期待として多く挙げられているのは、自然に親しみたい、学生同士の交流を深めたい、キャンプの基礎的な技術を身につけたい、などであるが、全体的に高い満足度が得られていた。

3. 6. 琉球大学のここがいい、ここが悪い

授業を通して、琉球大学には自然がたくさんあること、キャンパスが広いこと、などが良い点として評価されていた。逆に悪い点としては、キャンパス内にゴミが多いこと、学生のマナーが悪いこと、などが挙げられた。大学に対する新たな認識形成が図られたと推察できる。

3. 7. 担当教官のここがいい、ここが悪い

良い点として、堅くなくフレンドリーなこと、授業内容が興味を持てるように工夫されていること、などが多く挙げられた。悪い点としては、当日の集合場所変更など、授業進行に十分な準備がされていないのではないか、などといった指摘がみられた。

3. 8. 100年後の地球 or 日本 or 沖縄はどうなっているか

意見が多岐に渡るので一概に言えないが、将来に関して悲観的な予測が多かった。

3. 9. これから自然とどのように付き合っていきたいか

全体の意見に共通する点として、共に生きる、互いにいたわる、など、自然と平等なつきあいをしたいという考えが多くみられた。

3. 10. 自然とは何か

意見にかなり個人差があるので記載は省略する。

上記のような質問に加え、授業全体の感想を自由記述で求めた。代表的な感想として、「何を学んだかは言えないが、多くを学んだような気がする」「大学の授業にも関わらず、外を歩き、自分のやったことや見たことで授業が進んでいくスタイルは魅力的だった。」「俳句作りの時に一番「自然」と「自然の中の自分」というものを意識できたし、新鮮だった。」「自分の嫌な部分が多くでてきた。そういう点を再認識させてくれた授業…」「全体的に自然に触れることを目的とした授業が多く、ゆったり楽しめた。他の授業や毎日の生活が忙しいので。」「大学にこれほどの自然があることも改めて知らされました。」

身近な自然や、あるいは自分自身について新たな気づきや発見の機会を得ていたと考えられた。

4. 本授業を場面とした調査研究

筆者は授業を担当して3年目になるが、その間に受講学生を対象として3つの調査研究を実施したので以下に紹介する。

4. 1. 張本文昭（2000）イニシアティブゲーム体験が参加学生に及ぼす心理的影響

琉球大学教育学部紀要 56：219-223

イニシアティブゲーム体験が参加学生に及ぼす心理的影響について検討した。調査の結果、学生のグループ雰囲気が好ましい方向に変化した。またゲームは学生の集団技能や諸能力について自己認識する機会を提供していた。

4. 2. 張本文昭（2000）教育健康運動系科目「キャンプ」における学生による授業評価

琉球大学教育学部紀要 57：143-151

受講学生による授業評価を実施した結果、全般的に肯定的な評価が得られた。特にコミュニケーションと非日常経験について高い評価が得られた。全体的傾向として、動的な授業（実技・実習等）では高い評価が、静的な授業（講義、話し合い等）では低い評価となった。

4. 3. 張本文昭・大村三香（2002）環境教育的教材としての旧暦の可能性

野外教育研究 5（2）：55-60

授業期間中の毎週、旧暦に関する定期的な情報提供をプログラムとして実践し、認識調査を実施した。調査の結果、旧暦に関する情報提供が認識形成に効果的であり、環境教育の教材として有効であることが確認された。

5. まとめ

授業のふりかえり会などを通し、キャンパス内の自然を活用した授業は、学生にとって新鮮かつ新たな発見や様々な気づきの機会を提供していると考えられる。

6. 事後の課題

授業実践と、ふりかえり会における学生の反応から以下のような今後の課題が明らかとなった。

1. 学生の期待やニーズと、教官の考え・方針との整合性
2. 日常生活への一般化、仮説化
3. 動的な内容と静的な内容とのバランス
4. 体験の共有の機会を増やすこと
5. 授業評価の継続

保健体育部会報告

琉球大学 新屋 信雄

保健体育分科会は、9月20日（金）と21日（土）の2日間開催され、両日とも1題ずつの発表があった。初日は琉球大学の本村三男先生による「RHÖNRADTURNEN を健康・運動系実技に取り入れて」というテーマで、2日目は琉球大学非常勤講師の張本文昭先生の「キャンパス内の自然体験—授業実践とその成果から—」というテーマで発表が行われた。

初日は、RHÖNRADTURNEN（以後、ラートと略す。）という、日本ではあまり見慣れないスポーツを教材にした授業実践の発表であった。発表は体育館で実施され、口頭と実技を兼ねた形式で行われ、発表者と参加者が一体となって進められた。本村先生はラートについて、「宇宙の無重力空間を体験できる不思議なスポーツで、身体はまるで宇宙遊泳をしているかのようにゆっくり流れるように空中を移動する。生涯スポーツをはじめ、競技スポーツや障害者のためのリハビリ的スポーツとして、またショー的スポーツとしても楽しまれている。」と説明をされ、我が国でも徐々に普及しつつあることを紹介された。実際に、学生によるデモンストレーションを拝見して、実に様々な運動形態があり、参加者もついつい体験したくなるような楽しさを感じた。また本村先生は、「授業では、日本ラート協会技術検定証の5～3級程度のレベルを設定し、個々の能力に見合ったレベルを定め、それに合格することを目標に展開している。そうすることで、学生は達成感を味わいながら積極的に授業に参加することができる。」と説明されていた。従って、授業の評価は概ね良好で、多くの学生が「初めて回った時、感動した。」、「未知の世界を体験できた。」、「またラートがしたい。最高に楽しい授業でした。」等の肯定的な感想を示し、これからの大学体育実技の教材として注目に値する内容であることを実感した。課題としては、「ラートはまだ高価」、「安全性の面から多くの学生が受講できない」等が上げられ、参加者からの質問もその点に集中した。

2日目の発表は、会場を教室に移して、口頭形式で行われた。琉球大学の広大なキャンパス内の自然を利用したユニークな授業実践の紹介であった。発表者の張本先生は、「知的、身体的、社会的、情緒的成長、すなわち全人的成長を支援することを目的としている野外教育の考え方を基軸において、授業のテーマを、①自然との対話、②自己の他者認識（自分と他者との関係）を設定し、教師サイドからの一方的な指導ではなく、自己と自然、自己と他者との関係を学生自ら気付き、学び、積極的に作り上げていくことを主たる目標に、あくまでも教師は支援・支持する立場を貫き、教師と学生がインタラクティブな関係で授業を展開している。」と説明された。主な授業の内容として、1) 課題解決型ゲーム、2) 簡単な野草料理、3) 野外における危険生物の紹介、4) キャンパス内探索と俳句作り、5) 句会、6) コンパスワークと読図等があり、そのことを通して、単なるキャンプ技術の指導や訓練ではなく、自然に目を向け、自然と対話しながら他者との体験の共有化を学生自ら気付き、学び合うという、従来の教師主導型の体育実技とは異なる、実にユニークな授業実践の発表であった。最後に張本先生は、「授業内容については、広く学生に認

知され、授業登録希望者は常に定員を上回っている。今後の課題としては、学生の期待やニーズと、教官の考え・方針との整合性や日常生活への一般化が上げられる。」と述べられ、野外教育の重要性と実践成果をまとめられた。

保健体育分科会は、発表演題は少なかったものの、両日とも1時間から1時間半にも及ぶ発表となり、また参加者間の活発な情報交換もあって、盛況のうちに無事終了した。

プレゼミナールの意義と問題点

福岡国際大学 大里 栄子

1. はじめに

福岡国際大学は、本年度で5年目を迎えた新しい大学である。現在国際コミュニケーション学部・国際コミュニケーション学科の1学部1学科であるが、来年度よりデジタルメディアコミュニケーション学科をスタートさせる予定である。

本学の狙いは、今日の社会と生活をめぐる多次元的な国際協力関係の理解を基礎に、そこに存在する多様な問題に対処し得る人材の育成である。これを実現するために、

- (1) 実践的な外国語教育、
- (2) 情報処理技術の習得、
- (3) 各国の政治、経済、社会を含む

異文化理解や国際協力関係の理解

を3本柱とする学際的なカリキュラムを編成し、実践を試みてきた。

この際より効果的にカリキュラムを実践するために、セメスター制、50分授業、小人数教育、クラスアドバイザーなどの教育制度を取り入れており、プレゼミナールは、小人数教育やクラスアドバイザーと連動している。入学時に20人以内のクラスを編成し、各クラスのプレゼミ担当者がアドバイザーを兼ねる。

教育目標は、大学での学習方法の体得、学習意欲の向上が主要な点であるが、これと並行して生活指導、大学規範の指導、教科の履修方法、図書館の利用法などの指導を組み込んでおり、学生生活全般にわたる指導助言のシステムを採っている。

具体的な指導内容は、レポートの書き方、口頭発表の仕方、グループ研究法、文献・資料の調べ方などを中心に置いているが、最近の学生に読書量の減少が認められることより、読書指導にも力を入れている。この様な指導に関して図書館の果たす役割は大きく、その利用法については、図書館スタッフの協力を得ている。テキストとして、統一したものを全学生に持たせているが、その他の学習材料や指導方法は各教員によって異なる（用いたテキストは、「レポート・論文の書き方」吉田健正著、ナカニシヤ出版「大学で何をどう学ぶか」飯田文彦、PHP文庫）。前期においては、以上のようなことが主な内容であるが、平成14年度後期においては、前期の指導内容に加えて本学の学際的教育内容を理解させるため専門領域の異なる教員の講演を企画している。なお本ゼミナールは、基礎教養科目の必修科目として位置づけられ、前後期通年開講されている。成績は、出席、受講態度、レポート、発表などを総合して評価し、合格すれば2単位取得できる。

以上のような教育計画のもとに実践された4年間のプレゼミナールを通して、その意義と問題点について検討した。

2. 教員評価に基づくプレゼминаールの意義と問題点

各教員独自の工夫のもとにかなり力の入った指導が行われてきた。例えば、新刊書を各学生に提供し、その主題や主張などを手書きによりまとめ、発表させたり、年間のテーマを、コミュニケーションのとり方、レポートの書き方、読書法などに分けたきめこまかい指導、学生に興味ある課題に取り組ませたり、電子メールによる課題提出、グループによる調査研究など工夫された内容がみられる。プレゼминаールをスタートして2年半経過した時点での担当教員の自己点検評価の資料を基に、クラスによって内容の違いがあるものの教育目標の柱である読む、書く、話すについてはほぼ達成できたという評価が得られた。さらに総合的に検討し、次のような意義と問題点が上げられた。

○ 意義

- ①入学時の不安を解消し、学園生活に早く慣れることができる、
- ②人間学や人生への取り組みなどを学生と教員が共に学ぶことができる、
- ③読む、書く、話すなどの基礎学力を高めることに役立つ、
- ④学生同士、学生と教員との交流が深まる、
- ⑤新入生にとってクラスが拠り所となり心の安定感が得られる、
- ⑥自ら学ぶことや、学習に意欲的に取り組む姿勢を促せる、
- ⑦学生全般の学習状況や成績のみならず生活状況や態度をも把握できる、等。

○ 問題点

- ①教員の指導の方法が異なることへの不満がある、
- ②学生に教員の選択ができない、
- ③興味を示さない学生に強制力がなく、指導しにくい、
- ④授業としての認識が薄く、欠席が目立つ、
- ⑤学生に能力や意欲の差がありテーマの設定が難しい、
- ⑥系統だった指導が難しい、等。

3. 学生のプレゼминаールに対する反応

学生のプレゼминаールに対する反応を次のような諸点について質問紙により調査した。

- (1) 大学に慣れるために役立った程度
- (2) 大学での学習法を学ぶために役に立つ程度
- (3) プレゼминаールを通しての教員との交流の程度
- (4) プレゼминаールを通しての友人との交流の程度
- (5) 学生生活への満足度

以上に関する質問に対して、3件法による回答を求めた。さらに、大学生生活を送る上でプレゼминаールがどのような時に役立つか、またプレゼминаールについての要望について記述させた。

対象は、心理学受講生 61 名（男子学生 38 名、女子学生 23 名）である。

表1は質問(1)～(5)の回答を示したものである。その結果、大学に慣れるために役立ったと答えた者が、75.5%、大学での学習法を学ぶために役立つと答えた者、67.2%でほぼ狙いは満たしていると思われるが、改善の余地を残している。ゼミを通して教員と85%の者が交流できると答え、また友人との交流は83.6%の者ができると答えており、交流の場としての役割は大きい。

しかし学生生活の満足度は、68.9%であり、約3割が何らかの不満を抱いていることを示している。

プレゼミナールがいかなる時に役立つかという質問に対する回答より、学生のプレゼミナールに対して次ぎのような意義をあげることができる。

- ①単位になる、
- ②教員やクラスメイトとの交流、
- ③就職活動のとき、
- ④意見を発表したり、意見交換するとき、
- ⑤大学に慣れる、
- ⑥レポート、自分の考え、研究をまとめるとき、
- ⑦全体をまとめるとき、
- ⑧個人的な相談があるとき、
- ⑨大学についてのガイダンス、
- ⑩文章の書き方、
- ⑪基本的な常識を身につけることができる、等。

プレゼミナールについての要望として、

- ①教員の話の聞いたり、書いたりするだけでなく、遊びや交流がしたい、
- ②もう少し興味のもてる内容にしてほしい、
- ③スポーツがしたい、
- ④交流の場を大学以外に作ってほしい、
- ⑤もっと楽しいものであるべき、
- ⑥月一回にまとめてほしい、
- ⑦なくしてほしい、
- ⑧ときには学生の自主性に任せてほしい、
- ⑨もっと時間を増やしてほしい、
- ⑩先輩などの体験談を聞きたい、
- ⑪もっとイベントをやりたい、
- ⑫必修科目からはずしてほしい
- ⑬クラスによる差をなくしてほしい、等。

以上のように、なかには否定的な意見も見られるが、おおむねより意義のあるものにしたいという学生なりの期待が認められる。

教員の評価と学生の反応より、プレゼミナールの意義についてはほぼ一致しており、今後も続けることの教育的効果を期待できる。しかし教員が問題点として上げた点は、学生自身の要望を満たしていないことから生じていると考えられ、なんらかの創意工夫が求められる。

4. 将来の改善・改革へ向けた方策

以上のような資料よりプレゼミナールは継続したほうが良いと考えられるが、次ぎのような改善・方策を検討する必要がある。

- プレゼミナールを前期の半期にし、後期に専門科目担当の教員を加えた基礎ゼミナールを設け、学生に選択の余地を与える。
- 単位を前後期に分けて出し、授業としての認識をはっきりもたせる。
- テキストは各教員にまかせ独自性をもたせる。ただし教育目標、意義は守ることが必要。
- 成績評価は、従来どおり、出席、受講態度、レポート、発表などを総合して評価するが、特にレポートに対しては、基礎学力、学習への主体的取り組み、自己および社会への問題意識、将来の目標設定などについての統一したチェックリストを用い、学生に結果をフィードバックする。インターネットを利用しても良い。
- 総合ゼミとの組み合わせにより、全体との交流を図るとともに、研究成果の発表の場とする。
- 小集団方式の有効性をより生かすために専門家と教員との研究会を設け、より科学的な運営を計画する。例えば、学習への動機づけの方法、集団討議法、リーダーシップトレーニングなど。
- スケジュールに学生による企画を取り入れる

以上のような点を考慮しながら、平成 14 年度においては、本学の学際的教育の理解を狙いとした後期プログラムに表 2 のようなプレゼミ担当の教員による講演を企画した。現在プログラムを実行しており、さらに今後学生や教員の意見を反映させた充実した内容へと改善していく必要がある。

表 1 プレゼミナールについての学生の反応

対象 61 名		
(1) 大学に慣れるために役立つ態度		
1. 非常に役立ったと思う	10	16.40%
2. 役立ったと思う	33	54.10%
3. 役立ったとは思わない	16	26.20%
4. その他	2	3.30%
(2) 大学での学習法を学ぶために役立つ程度		
1. 常に役立っている	6	9.80%
2. 役立っている	35	57.40%
3. 役立っていない	18	29.50%
4. その他	2	3.30%
(3) プレゼミナールを通して教員との交流		
1. 大変交流できる	20	32.80%
2. 交流できる	34	55.70%
3. 交流できない	6	9.80%
4. その他	1	1.60%
(4) プレゼミナールを通して友人との交流		
1. 大変交流できる	18	29.50%
2. 交流できる	33	54.10%
3. 交流できない	9	14.80%
4. その他	1	1.60%
(5) 学生生活の満足度		
1. 非常に満足している	4	6.60%
2. 満足している	38	62.30%
3. 不満である	17	27.90%
4. その他	2	3.30%

表2 平成14年度後期プレゼミナールスケジュール

プレゼミナール②⑤⑥⑨⑩〔秋入学生〕		プレゼミナール①③④⑦⑧⑪⑫	
【水曜日・7時限】753教室		【金曜日・7時限】753教室	
9月25日	講演〔相賀〕 「地球大気環境の変化と植物」	9月20日	月曜日の授業を行う。
10月2日	クラスゼミ	9月27日	講演〔大里〕 「パーソナルコミュニケーションについて」
10月9日	講演〔大里〕 「パーソナルコミュニケーションについて」	10月4日	講演〔山本〕 「場所と人間－福岡国際大学と私」
10月16日	クラスゼミ	10月11日	クラスゼミ
10月23日	講演〔山口〕 「国際政治の見方、考え方：ユーロセントリズム（欧米中心の見方考え方）への反省」	10月18日	講演〔相賀〕 「宇宙に人間生活環境を創る」
10月30日	クラスゼミ	10月25日	クラスゼミ
11月6日	講演〔松富〕 「人間と社会」	11月1日	大学祭準備のため休講
11月13日	クラスゼミ	11月8日	講演〔黒木〕 「暮らしから考える政治」
11月20日	講演〔井上〕 「＜指紋＞の話～快樂亭ブラックと探偵小説～」	11月15日	クラスゼミ
11月27日	クラスゼミ	11月22日	講演〔谷口〕 「北タイでの事業展開の難しさ」
12月4日	講演〔大浦〕 「脳について」	11月29日	クラスゼミ
12月11日	クラスゼミ	12月6日	講演〔大浦〕 「脳について」
12月18日	講演〔山本〕 「場所と人間－福岡国際大学と私」	12月13日	クラスゼミ
1月8日	クラスゼミ	12月20日	講演〔森岡〕 「商慣習について」
		1月10日	クラスゼミ

理系の作文教育

崇城大学 今江 正知

1. はじめに

大学における作文教育の必要性や重要性が話題にされるようになって久しく、そのことに関する書籍や論評もいろいろと出されている。当初は文系の問題と考えていた理系の教師も、文章が書けない、書けないだけでなく読んでも正確に理解出来ない学生が多くなっていることに当惑し、質問しても主語・述語抜きの単語をポツンと答えるだけで論理的に説明出来ない学生が増加する一方の現実に困惑している。

何故、作文が出来ないのか。高校までの教育が悪いと言ってしまえば一つの「正解」ではある。しかし、高校は中学校が悪いといい、中学校は小学校が悪いと責任転嫁をしていて片づく問題ではない。作文が出来ない、話が出来ない学生が多い事実を指摘して評論すれば済む問題でもない。誰もが困った事態だと考え、どうにかしなければという。しかし、どのようにしたらよいかの具体的な話は少なく、そんな議論よりも誰かどうにかしてくれという願望で終わっているように感じる。作文が文系だけの仕事とまでは考えなくても、作文教育は自分の仕事ではない、自分の専門ではないという言い訳に逃げ込んでいる感じすらする。

何よりも重要なことは、現実に、目の前に作文が出来ない学生が大量に存在する事実である。書けないということは、読むことも下手で、話すことも聞かれたことに○・×か単語で答えるだけ、または、3択や5択の回答例が準備された質問でないとは回答出来ないことである。そのような学生数が年々量的に増えるだけでなく、質的に書けない・読めない・話せない程度が低下してきている。この現実に対して、自分に出来ることは何かと試みてきた試行錯誤の事例と、その中で考えたことを報告する。

筆者が担当している講義は「環境科学」で、生物学的な自然（生態系）と人間の生活との関係を軸に講義を進めている。この科目は選択科目であり、また、専門科目の基礎として到達点の目標が厳しく求められる基礎科目でもない。それだからこそ可能だった試行ともいえるが、相当に荒っぽい方法で学生に考えることを強要し、考えたことを他人が納得するように説明させる形で、無理矢理に作文を強制する授業を行ってきた。

文章を書くことについて、「理系の作文技術」(中公新書)が話題になり始めた頃は、この本を学生に紹介するだけで効果があった。学生自身が作文能力の無いことを自覚し、自らの問題として考える判断があったからである。しかし、そのうちにこの本を読んでレポートを書くことを課題として指示し、レポートの提出を義務づけなければ読まないようになってきた。読むように紹介しただけでは、先生の趣味の対象はわかったが自分の趣味とは違う、したがって先生の趣味に合わせる必要はないと考えたのであろう。その後も、新書程度の本を課題として読ませることを続けてきたが、書かせたレポートの内容が次第に貧弱になるなど、本を読むことも出来ない学生が年々増加してくることを痛感するようになってきた。それで、授業の中でいろいろな形で文章を書かせてきたが、それに対する学生の反応は予期しなかったことが多く、いろいろと考えさせられた。ただ、理系の人間が作文教育をいうと、学生たちからも教師たちからも嫌われることが

多い。しかし、書かせ続けていることを通じて、彼らの考え方が理解出来るようになり、自分の教え方の反省になったことも多い。

I 学生は、何故作文が出来ないか。

作文が出来ない第一の理由は、学生が育ってきた社会環境の中で作文の必要性が極めて低いこと、また、社会や学校の教育システムの中で作文の基礎訓練をする機会が少なすぎることである。現在の義務教育のカリキュラムでも作文教育を行うことが定められてはいる。しかし、「綴方教室」の昔から作文教育が趣味という奇特な先生に巡り会わないかぎり、形式的なものに終わるのが普通である。作文教育は手間がかかるし、しかも効果が目に見える形に現れにくい。逆に手抜きをしても、その欠陥がすぐ出てくることはほとんどない。そのため、作文の好きな先生が趣味的に文集を作るくらいで、現在の小・中・高校の先生は上級学校の試験に合格させる仕事に追われて忙しく、教育の現場で趣味的なことをしている暇はないと考えている。

現在の小学校国語でも、授業時間の十数%は文章の書き方を教えることが基準になっており、挨拶文の書き方とか電話のかけ方などを指導することになっている。また、高校では受験のために「小論文の書き方」が指導されている。しかし、起承転結の問題とか句読点の使い方とかの技術的な、悪く言えば小手先の問題が主で、何を書くかという根本が抜けている感じがする。とくに最近の先生たちが受験のために教えるとなると、パターン化した書き方の「正解」を、効率的に覚えさせるタイプになるような気がする。

小論文や作文の書き方で重要なことは、表現法のテクニックの問題よりも、何を書くかという内容の問題である。頭の中で考えたことを、論理的に誤解されないように説明することである。つまり、学生たちに物事を論理的に考える訓練が出来ていない、いい換えれば、話したり書いたりする内容の筋道が頭の中に形成されていないことが問題なのである。

戦前から戦後しばらくまでは、子供の自主性よりも先生の信念を大切にして、子供が嫌がっても書くことを強制する先生が存在した。しかし、押しつけ教育は良くない、子供の自発的な取り組みこそが大切だという風潮の中で、作文教育も子供たちが書きたいことを書かせる、書きたくなければ書く気になるのを待つ、それが育つように仕向けるだけの傾向が強まったように思える。とくに作文教育は子供の心に踏み込むおそれがあると、敬遠される傾向があるように思える。詩歌などの作文ならば、その人の個性の発達や興味に合わせて自由に展開させることが大切かも知れない。しかし、事実に関する情報を誤解されないように伝達する理系作文の訓練は、思想信条や感性とは関係なく、強制してでも訓練を重ねる必要のあることではないだろうか。

第二は、理系の作文に関する理解不足というか、文学的な作文との区別がつかないために生じた誤解である。一般に作文といえば、自分の気持を表現することが大切と考える人が多く、気持の表現だから子供の心に踏み込むと心配するのだろう。しかし、理系の作文は気持や心の表現ではなく、目の前の事実や自分の意見を誤解されないよう相手に伝えることが重要で、それこそが基本である。文学的な作文のように、美しいものを見た感激や心温まる情景を見た感動を、上手に表現して相手までも感動させるなどを目的としたものではない。作文を気持の表現と考えるから、美辞麗句を使って格好良く書きたくなるし、文章は全人格の表現と思い込むから益々書きにくくなるのではないかと思う。

理系の作文は事実や意見を伝える文章であると理解出来れば、個人的な感情や人格などとは無

関係に、情報が正確に相手に伝わる書き方が大切と理解出来る。このようにして、悪い意味での文学的作文の重荷から解放されれば、冷静に事物を観察して論理的に説明する訓練が作文力の向上につながるもので、個性とか感性の問題ではないことも理解出来る。そして、このタイプの文章こそが社会の中で仕事の文章として広く使われているものである。

第三に、講義をしていて強く感じるのは、学生たちが常に「正解」を求めていることである。それも急いで正解だけを手早く、出来るだけ簡潔な形で教えてくれと求めている。受験体制の中で、正解だけを効率よく覚える勉強と、問題が出されたら正解を素早く回答する訓練を積み重ねてきた結果であろう。ここでは、回答が「正解」であることだけが重要で、その正解が導かれた筋道や理由などを、いちいち考えている暇はない。解答として選ぶように並べられている単語や文章の中から、正解だけを間違いなく素早く選び出せる判断、論理的というよりも嗅覚的な識別能力を大切と考えているように思える。というよりも、瞬間的に正解を見分ける能力を育てる訓練を、意識もせず重ねてきたというべきだろうか。

また、的の面積を大きくして「正解」がはずれないよう、広い範囲を包括する回答をする傾向もある。以前、医進課程のクラスを担当していたとき、奨学金の面接で「君の親父は何か」と（言葉使いが悪かった反省はしているが）質問したところ、「男です」と答えた学生がいる。言われた瞬間は馬鹿にされたと腹を立てたが、奨学金が掛かっている本人は大真面目で、悪意や冗談で言ったのではない。「何を言うか」と叱ると「男でないと言うのか」という顔をする。範囲を狭めて職業を答えたりしてはくれるより、絶対に間違いでない「男」という事実を答えたのであって、質問の趣旨を「君の父親の性別は何か」の意味に解釈したことになるとは考えていない。「頑張ります」と答えれば、いつでもどこでも「正解」と考えるのと同じ発想である。

このような考え方や行動の前提には、すべての問題に正解が一つだけ存在するという強い思い込みがある。正解が常に一つだから、試験範囲の正解を全部暗記して欠落が無いようにする。そう考えれば、筋道や理由を考えて回り道をするのは非効率的で不合理な勉強法になる。たしかに、入学試験の問題は正解が一つになるように作られている。正解が無い問題や正解が二つ以上ある問題を出した大学の責任者が、マスコミの前で陳謝している姿が報道される。しかし、正解が一つという問題は、入学試験という特殊な条件下で作られた特異な問題であるとか、正解が幾つもあったり完全な正解が無い場合があったりするものが普通とかは考えていない。

この正解願望には重大な問題が含まれている。一つは、すべての問題に一つしか正解がないという誤解だが、もう一つは、何故それが正解かを論理的に理解する努力を放棄している点である。そして、この正解願望が受験生の丸暗記能力を高めるだけに機能し、論理的な説明をする能力の発展に強いブレーキをかけ、作文能力の向上を阻害する大きな要因となっている。

作文能力の低下だけでなく、この正解願望の自然観は一般教育の課程を修了して専門課程に進み、自分が将来取り組むテーマに関する講義や実験、卒論などで研究に参加するにつれて大きな障害になってくる。自然科学の研究であっても工学の技術開発であっても、新しい課題に取り組む場合には多数の仮説の中から正しい道を探す作業が大切で、最初から答えがわかっている筈がないとの認識がすっぱりと抜け落ちているからである。

第四は前述の正解願望と密接に関連しているが、試験問題の大部分が○・×や単語で回答するか、記述されている三つか五つの文章の中から記号か番号で回答を選ぶ3択や5択の形式であることの影響である。問題は完全にセットとして出来上がっているから、指示された範囲から正解

を一つ選ばばよい。選んだ理由を説明する必要はなく、提示された範囲以外のことを考える必要もない。正しく選べれば得点するし、間違っただけで選べば得点出来ない、それで完結して他に負うべき責任は全くない。受験のときには正解が解らなくても必ず総ての回答欄に記入するよう、空欄を残さないようにと指導され続けている。

数学の試験で公式を使って綺麗に問題を解いた学生のうち、その公式を使った理由を説明出来た学生は1～2割だったという。ここでも、公式を選ぶ判断は理性や論理ではなく、丸暗記か嗅覚的な感覚に委ねられている。問題の文章を作り解答として選ぶ文章のセットを作るのも、正解を論理的に説明して覚える手伝いをするのも総て先生の側の仕事で、記号や単語の形で正解を選んで解答欄に記入する作業が学生の側の仕事であると、綺麗に分業が成立している感じがする。そうなれば、問題や回答について論理的に説明しようとする学生は育ってくるはずがない。

2. 作文教育を始めたきっかけ

最初に気になった現象の一つは、講義の中で質問しても学生の反応が悪くなってきたことである。小学生のように、ハイ！ハイ！と手を挙げろとは言わないが、質問しても自分があてられるまで答えようとしないう学生が増えたのに気づき、それならば全員に答えさせると紙に書かせてみた。それから講義には常にB6版程度の裏紙を持参し、思いつくことがあると全員に回答させることにした。これが作文教育を真剣に考えるようになったきっかけである。書かせた事例は後で紹介するが、すべて文章で説明することを基本とした。

それとは別に、一番古くから原稿用紙にまとめた作文レポート（教科内の課題レポートとは別に）を課したのは、熊本大学の医・理学部の生物学実験である。半年間の実験（3時間×15回）を終わったとき、実験を通じて何を得たか、何が難しくて、何が上手に出来て、何に苦勞して、どんなことを考えたか、また、後輩のために今後の実験のあり方についての希望などを「実験を終わって」と題して書かせた。それに対して教官側に「単位が掛かっているのに学生が正直に書くはずがない」「そんなにお世辞を言って欲しいのか」という意見もあったが、授業に関する苦情や批判でも、それが的はずれでも誤解であってもよいから遠慮せずを書くように指示して書かせた。この作文を通じて最も驚いたことは、数人の教官が動物・植物・形態・生理などの実験を個別に分担して行っていたのに、最後に全体をレポートにまとめさせた結果として、全部の実験を相互に関連する一貫した流れとして深く理解する効果が大きかったことである。

その事例にならって、講義でも最後の時間に白紙を配り、同じ趣旨の「講義を終わって」を書かせることを始めた。この場合も、「良い講義でした」など内容のないお世辞よりも実のある批判の方が価値高い、「多くのことを学んだ」「学問の面白さがわかった」「勉強する意欲が湧いた」などと書くなら、どういう点が、どういう理由で、どのように・・・と説明をしないと、口先だけのお世辞であると強く言うておく必要がある。このように講義の最後の一回だけでも「講義を終わって」「この講義で学んだこと」「この講義に望むこと」のようなテーマで書かせることは、学生側のまとめになるだけでなく、教師側にもいろいろな面で得るところが大きい。

無理矢理に作文させることの効果を、身に沁みて感じたのが工学部の学生での事例である。工学部の学生は作文が下手であると自他ともに認め、作文は自分たち理系とは全く別の勉強と信じている感じがある。ところが、熊本大学における総合科目の開講年次が3年次から1年次に変更され、全学対象の講義で各学部の新入生が混成されたクラスを教えたときの経験である。選択し

たテーマ（「環境」とか「水と人間」とか「映画文化史」とか）について、「環境とは」「環境問題とは」「この講義で学びたいこと」などをはじめ、講義の進行の中で次々に質問し、ビデオを視聴させてはまとめや感想（感じたことより考えたこと）を書かせ続けた。そのとき、最初は文学部など文系の学生が綺麗な言葉で書くのに対して、工学部の学生は稚拙なものが多かった。しかし、それを続けていて最後に一番上手になったのが、驚くことに工学部の学生であった。

それまで3年生に文章を書かせてきた経験では、工学部が最も出来が悪かった。文系の学部の学生は文章が書けるが、理系とくに工学部の学生は（一部例外はあるとしても）文章が書けないと教師も学生自身も思い込んでいたように思う。しかし、1年生の初めから作文を書かせ続けると、工学部の学生が大きく伸び、逆に最初は器用に書いていても伸びないのが文学部の学生であった。考えてみると、工学部の学生には文章を飾るだけの知恵がなく、自分が知っている数少ない単語の範囲で考えるしかない。そして、事物を正確に記述し意見を誤解されないように伝えるために、野暮でもよいから論理的に考える努力をしたということであろう。それに対して、文学部の学生の伸びが悪いのは、上手な表現などの形にこだわって、論理的に誤解されないように書く意識が比較的弱いからかと思える。つまり、作文が出来る出来ないは、普通誤解されているように生来の感性や才能の問題ではなく、訓練の問題だと実感したのである。

3. 講義中の実践例

講義中に書かせる内容は、学生が説明する形式なら何でもよい。学生は習慣的にテストとは説明文のついた問題に○・×や記号で答えるものと誤解しているから、それと逆の発想のものを押しつけることが目的だからである。

具体的な事例を紹介すると、環境科学の講義では最初に「学内で、今、どこに、どんな花が咲いているか」を書かせている。身近な環境に目を配って考えることが環境科学の基本、そこで観察力のテストをすると説明するが、この問題は工学部の学生にとっては無理難題である。ほとんどの学生が何も書けないか、桜とかチューリップとか書く程度である。次週の講義のとき、再び同じ出題をすると学生は「先週しています」という。「帳面は消してある」という発想である。

「先週の出来が悪かったから、もう一度チャンスを与えるのだ」というと仕方なく書き始めるが、あまり書けない。調べて来るようにと指示されていないからである。書き始める前に、どこに、どんな花（名前は知らなくてもよい）があるかの問題だから、花の名前を書くだけでは駄目とか、可愛い花とか綺麗な花とかいう主観ではなく、色や形など客観的な事実を説明するなどの注意を与える。しかし、前回と較べて大差ない内容が多い。

次の週に3回目のテストをする。そのときに「2回行ったにも拘わらず進歩のない者が多い、しかし、初回よりも具体的に説明しようとする学生も出てきた。たとえば、場所の説明に学内の略図を書いた学生がいた」などのヒントや、悪例として「門のそばとか通学路とかだけでは、どこの門か道か具体的な場所は相手に伝わらない、下宿のそばとか花屋にあるでは問題の範囲逸脱である」などと注意を与え、観察力と説明力のテストであることを強調して書かせる。

3回目になると、さすがに大多数の学生は何かを書くようになってくる。しかし、頑としてゼロ回答の学生も残っており、この事実は今後考えるべき多くの問題を含んでいる。「来週も同じテストをする」と宣言すれば予習してくるが、指示されないことはしない。テストがなかったら予習して損するという事だろうか。地図を書いた知恵を褒めて紹介しても、地図を添えて回答

せよと指示しないと書かない学生が多いのと同じだろうか。最近では4回目まですることで、やっと指示しなくても全員が回答するようになってきているが、早い段階から努力して回答していた学生ほど観察力・説明力ともに伸びてくる。

講義中に書かせる問題は、無理難題である方がよい。無理難題を出すことの大切さに気づいたのは、前に述べた「講義を終わって」を書かせていたときのことである。「批判も歓迎」と言った後、「誹謗中傷はするなよ、不愉快になるから」と冗談を言ったら大笑いになった。それなら区別がついているのだと気づき、「批判と誹謗中傷の違い」を書かせた。学生は困って、正確に書けた者はほとんどなかったが、それでも全員なんとかでっち上げた。全員が笑ったから、区別がつくはずと言いがかりをつけた形であるが、質問に対して、屁理屈でも、出鱈目でも、でっち上げでよいから何とか説明させる方式である。同じように、「草と木の違い」の説明も、実生活の中では間違いなく区別していることだからと、日頃は意識せずに行っている頭の中の作業内容を、意識の表面に上げて論理的に説明させる作業である。

学生に書かせる内容は、講義の準備段階から計画しておくこともあるし、授業中に思いついたアドリブ的な問題もある（批判と誹謗中傷の区別まで聞くのだから）。授業内容と直接深く関わる話題もあるし、あまり関係なさそうに見える話題や、内容よりも考える訓練が目的の脱線した話題もある。以前は、講義の中で学生に質問すると、当を得ているかの的はずれかは別にして、意見を述べる学生が存在した。そこから学生を巻き込んだ形で講義が進められたが、「解りません」と条件反射的に答える学生が増えたので、全員に半端でもよいからと意見を書くことを強制したのであり、その延長としての作文教育だからである。最初は何を書いて良いかわからない学生が多いが、強制し続けると次第に何かを書くように育ってくる。また、熱心に書く学生が増えてコツコツと鉛筆の音が響くようになると、次第に全員の書く量が増えてくる。この場合も、正解を求めているのではない、間違っても、屁理屈でも、でっち上げでもよいから、相手が少しでも納得するように説明する作業だと指示し続けることが大切である。

また、講義の中でビデオ教材を利用した場合には、テープが終わってから内容をまとめさせている。最初は薄暗い中で眠らせないための処置であったが、現在では話を聞いて内容を把握する訓練と、ビデオから講義に移るとき全員が同じスタートラインに立つための作業と意識して行っている。視聴中にメモをとることで聴いている話の整理が出来、書くときの足がかりになると指導し続けるが、余分な仕事はしたくないのか、視聴が終わるまで作業にかからない学生が多い。

4. 書かせるにあたっての留意点

高度な役に立つことを書かせようとするより、まず文章を書く練習だけと割り切って行った方が有効である。作文教育に大きく時間を割く余裕はないから、講義に関連する質問を5分か10分かけて文章で説明させる程度から始めるのがよい。最初から立派なものをと欲張るのも、立派に出来ないからと放棄するのも間違いで、半端な訓練を積み重ねることが重要である。また、毎回実行しなくてもかまわないし、他の講義の幾つかが並行して書かせる訓練を始めてくれれば、効果は相乗的に大きくなる。

文章を書くのは自己満足のためではなく、他人に読んでもらうことが目的である。したがって、字は下手でも読みやすいよう丁寧に、レイアウトにも気を使って書き、誤解が入り込まない書き方が基本と繰り返し注意する。そのような当たり前のことは一回言えば十分という人もいるが、

学生が「正解」の台詞として覚えることと、身についた行動になることとの間には大きな時間差がある。次に述べることも含めて、この段階の理解が不十分だから文章が書けないと考え、それを乗り越えたことを確かめながら次の段階の指導をすることを考えていた方が安全である。試みに前述の「学内の花」や「草と木の違い」のような問題をさせてみると、簡単な事実の説明すら論理的に出来ない学生が多い現状が見えてくる。大学の先生は、教えたことを理解しない学生が悪いと考え、小学校の先生は教え方が悪かったかと考える。その小学校の先生的なチェックを、大学でももっと具体的に心がける必要があると考えている。

文章を書かせるにあたって「主語と述語を意識する」ことを繰り返し注意するが、なかなか真剣に考えようとしめない。理由は明白で、主語・述語・目的語などの文法知識は国語や外国語の問題であり、理系の講義に持ち込むのは範囲逸脱で越権行為と（意識の表面には出なくても）考える学生が多いからである。この問題は、文章が不正確・不明確・舌足らずになっている実例を紹介したり、何回も注意したりして少しずつ定着させるしかないようである。

次いで、質問するにあたっては「正解」を求めているのではなく、「何が・・・」「何を・・・」「どのように・・・」など事実の具体的な説明と、「何故・・・」「だから・・・」「それで・・・」と述べる意見を求めているのだと、これも繰り返し強調する必要がある。前述したように「正解」だけを脇目もふらずに記憶する訓練を重ねてきた学生は、すぐに具体性のない一般論の「正解」の中に逃げ込んでしまう。試験前の勉強について聞くと、「頑張ります」だけで、どの学科の、どこから、どのような勉強をするかの具体性が全くない回答を「正解」と考えている。「頑張ります」が正解でないというのなら、「頑張りません」が正解かという発想である。そのような段階の学生が多いから、事実と意見を区別して述べるのが重要と本当に理解出来るのは、相当に訓練を重ねた後の話になる。

回答になっていない例として小さい子供の話をする。「今日は何をしていた？」と聞くと「遊んでた」と答える、それに続けて「どこで」「誰と」「何をして」と大人が次々に質問を重ねると行動が見えてきて、「楽しかったか」と聞くと「うん」と立派な感想で締めくくる。子供は立派に話をしたつもりでいるが、大人が作った筋道に単語で反応したに過ぎない。極端な例のようだが、解答欄正解主義の学生には全く同じ傾向が認められる。

解答欄正解主義の学生は、問題を作る教師と解答欄を埋める学生とが分業して試験を成立させていると考えている感じがある。このことは、定期試験の最後に「出題されている問題と別に試験範囲から問題を一つ作って解答せよ」という出題をしていて気づいたことである。当初は、山がはずれた学生に対する救済と、学生がどこを重要と考えたかを知ることが目的だったのに、十数年前からこれを重荷と考える学生が増えてきたからである。最近では、問題作りも解答書きもまともに出来ない学生が多くなっている。問題として出されれば記述式の問題にも義務として答えてやるが、問題まで作れとは教師の怠慢ではないかと思われるような気がする。

この無理矢理に何かを書かせる方式には反発する学生が多い。しかし、回を重ねるにしたがって書くことが少しずつ苦でなくなり、文章は頭で考えた筋道を書くものだと理解する学生が徐々に増えてくる。また、屁理屈やでっち上げに楽しみを見出す学生も少しずつだが出てくる。

5. 書かせた後の処置

書かせたものは平常点として成績に含めて評価する。このことは、はっきりとっておく必要

がある。こう言うと、文章の採点は難しいと心配する人が多く、それが文章を書かせることを躊躇する原因になっているように思える。しかし、書かれたものに目を通して「良い」「悪い」「まあまあ」の3段階に分けるのはさほど困難なことではない。講義に関連しての作文だから、質問の課題にどれだけ答えたかを採点し、文章の上手下手を採点するのではない。また、3段階に分けるのに苦勞するような精密な文章を要求したのでは作文の訓練にならない。

3段階に分けると、「とくに良い、悪い」を区別すれば5段階の評価になるし、気に入らないものは不合格として別にはね除ければよい。1回の評価だけで及落を決めるものではないから、たとえ誤解した採点をして、回数を重ねれば悪影響は消せると考えたらよい。ただ、何回かの評価を並べてみると、ざっとした採点でもミスは少ないことが見えてくる。

書かせたものの全部を採点して成績に加算しなくてはならないと、義務感に縛られる必要はない。もっとおおらかに授業の中に活用する方法があるからである。学生の現状や実態を把握して次に生かすだけで十分な出題もあるし、点数化するよりも内容について講評することが大切な場合もある。前述した「学内の花」など、まさに書き方指導の具体例となる。また、学生とは誤解力が旺盛な動物（学生だけではないが）であるから、その誤解を顕在化して間違いを正せることも、この作文教育の大きな価値である。ただ、その間違いを正すときには、次の講義の中で全員を対象にして説明するなど、書いた個人が表に出ない配慮は必要である。

作文教育というと、学生の書いた文章を添削する仕事と考える人が多い。しかし、この段階での添削は不要、というよりも添削に耐える文章にはなっていない。せめて誤字脱字だけでもと思って朱を入れて返却すると、悪いのはそこだけで他は完璧だと錯覚する。それよりも、ざっと読んで気づいた誤りや大勢が誤解している部分などを、全員を対象に講評の形で行った方が効果がある。また、事実と意見を区別して述べるなども、この段階での実例を基礎に教えた方が理解する。ただし、欠点の指摘が向上を目指す助言であると考えない学生が多いから、意地悪な悪口ばかり言われて不愉快、傷つくと嫌われるのは覚悟しなくてはならない。

6. 書かせ続けて見えてきたこと

無理矢理に書かせることを続けていると、言葉の意味や用法の違い、また、論理の筋道の違いなどが少しずつ見えてくる。口に出す言葉も、世間一般の常識とは別に、自分の都合で広い範囲を含むものとして、または、非常に限定した意味にして使っていることがある。その差異をどう認識し、どう説明したら学生と話を噛み合わせることが出来るか。そのためには、学生の思いがけない反応と出会ったとき、納得出来る論理の筋道を考えてみる必要がある。学生本人は明確な意識として自覚していなくても、無意識の底には論理の筋道が存在するはずだからである。この作業は面倒なようだが、慣れてくると新しい発見があって案外楽しいものである。その探求の積み重ねによって学生の反応を論理的に理解出来、対話が成立するようになる

20年以上前、「講義を終わって」の中に「退屈しなかった」と書く学生が出てきた。最初は落語や漫才ではないぞと腹を立てたが、時間が経つうちに褒め言葉だったことがわかり、驚きもしたがいろいろと考えさせられた。退屈しない楽しい講義であることが大切なのだ！それが先生の仕事だと考えれば、興味を持てるように楽しい講義をしない先生が悪いという論理の筋道が見えてくる。勉学とは自分に付加価値をつける行為だから、ずっとずっと先には楽しみがあるにしても最初から楽しいものではなく、基礎訓練は苦しいのが当然と我々は考える。学生は受け身の学

習し olmayan 行動で彼らの論理を押しつけてくるのだから、それに対して我々の論理をどのように展開して押し返すかが問題である。

また、学生に質問すると「習っていません」という返事が多い。最初は「知りません」と同じ意味と錯覚していたが、それは大きな間違いであった。「知りません」は自らの無知に対する責任を認める態度だが、「習っていません」は自らの責任は認めずに、教えなかった親や教師の責任を糾弾している態度だからである。「親や先生のために勉強してやる」という論理が生き残っている学生も存在するから、「ここは大切だから」「試験に出すから」「成績が上がったら褒美を」などの言動が、彼らの間違った論理を育てていないかと反省する必要がある。

7. 終わりに

理系の作文教育は、それを目的に何単位かの授業を開講すれば済む問題ではない。どういう学問を専攻した先生が、どれだけの学生を相手に、どのように実施したらよいかを具体的に考えれば、多くの理系講義の中で、講義のついでに、少しずつ実施するしかないことがみえてくる。

作文教育は「正解」を教えるよりも効率が悪く、効率的に作文の「正解」を覚えさせることは意味がない。一般教育における作文教育の主眼は、受験体制の中で身体に染みついている正解丸暗記の勉強から、自ら論理的に考える勉強に転換させる作業である。現在の学生に最も欠けているのが作文能力であることの問題点を見つめ、一人でも多くの教官が自分の講義の中で文章を書かせる訓練に参加することが重要と思う。そうすれば学生の文章を書く能力、言い換えれば論理的な思考力は確実に向上する。回り道のように見えても、正解丸暗記だけの世界から抜け出す正道であり、むしろ近道ではないかと考えている。

文章を書くことは、その中に多くの間違いを含んでいたとしても、論理的に考えて説明する訓練になり、自分が話すことを聞いてもらい、他人の話聞く基礎にもなる。また、一度書かれた文章は推敲することによって磨かれ、間違いは正されてくる。「正解」以外は答えようとしないう学生には、嘘でも、屁理屈でも、でっち上げでもよいからと、まず一つの説明をさせてみる。無理矢理にでも説明を考えさせる作業は、ある事象に関して仮説を立てて考える能力の開発でもある。また、誤字脱字がないようにとの注意は言い続けなくてはならないが、筋道を考えて書くことが主眼だから、誤字脱字ゼロを早い段階の目標にしてはならない。

文章を書くことを強制する、考えることを強制し続けると、脱落する学生が出てくる。しかし、それは能力不足（一般に成績が悪い学生）というよりも、正解丸暗記が通用しないので不愉快、悪いところを指摘されるのが嫌（失敗を乗り越えて向上するための助言と、揚げ足取りの引き倒しとの区別がつかない）、無理矢理考えさせられることが苦痛という学生であって、不器用でも考えることを始めた学生は伸びてくる。一人でも多くの教官が参加して、文章を書く作業を学生に押しつければ、大学の勉強は正解丸暗記では駄目だと、早く悟ることになるだろう。

教育とは教え込むことではなく、導き引き出すことであると多くの人がいう。しかし現実には、受験のために正解だけを丸暗記させて疑問を感じる余裕すらない押し込み教育が行われ、それが理科離れの大きな原因になっている。正解丸暗記が合理的で効率的な勉強法だと心身の奥底まで染みついている学生には、安易な「知識の切り売り」にならない教育が必要で、筋道を立てて考える教育路線への切り替えには理系の作文教育が大きな力になると考えている。

法学基礎演習の試みー専門教育から教養教育への架橋ー

琉球大学 森川 恭剛

1. 法学基礎演習の試み

琉球大学総合社会システム学科法学専攻課程では、学生たちの能動的な調査・発表・討論を通して法学的なものの考え方の基礎（リーガルマインド）を培っていくことが必要であると考え、1997年4月から、1年次必修科目として、「基礎演習Ⅰ」（前期）と「基礎演習Ⅱ」（後期）を開講している。受講者数は1クラス25人から35人であり、教官4名で昼間主コース3クラスと夜間主コース1クラスを担当している。

2. 法学基礎演習の内容

法学基礎演習の内容については上記の目的を達成するために担当者間で事前に十分な打ち合わせをしているが、何れにせよ教官と学生または学生間において自由闊達な意見交換を行うことが必要であることから、各クラス間で細部にわたって演習内容を統一することはできない。基本的に了解されているのは、グループ学習を中心において、その他に外部講師による講演（弁護士・司法書士等の法律専門家や嘉手納基地爆音訴訟等の訴訟当事者等）、ディベート形式の討論会（死刑制度について、夫婦別姓について等）、ビデオ鑑賞（「女性国際戦犯法廷」、「12人の優しい日本人」等）、および施設見学（裁判所・刑務所・児童相談所・消費者センター等）等を組み込むことである。また演習時間外の課題として、数冊の推薦図書の中から一冊を選ばせその書評を執筆させることもある。

演習の柱となるグループ学習は、大まかにいえば、新聞・テレビ・インターネット等を通して既に触れている様々な社会問題を法的に捉え直して、法的な問題解決能力を高めるために行われる。そのテーマ設定については幾つかの方法が考えられるが、例えば次のように構成することができる。

<例1> 人権感覚を養うための問題群

- ・出身高校の校則を持ちよって子どもの人権について考える。
- ・医療事故から患者の権利について考える。
- ・米兵の犯罪事件を取り上げて刑事被告人の人権について考える。
- ・セクハラ訴訟を手がかりにして男女平等について考える。
- ・障害児教育のあり方を調べて少数者の人権について考える。

<例2> 国際的な視野を養うための問題群

- ・オランダの安楽死法
- ・フランスの婚姻制度
- ・ドイツの環境保護運動
- ・スウェーデンの社会福祉制度
- ・アメリカの銃規制法

3. 期待される教育効果

数名からなるグループ全体で一つの大きな問題に取り組み、報告を分担するグループ学習は、各自が何のために勉強するのかを意識させる。問題を立て、解決を導く、そのために資料を収集し、読み、考えるのだと気付きはじめる。

そして発表を行い、質疑応答や討論を経ると、着眼点や考え方は多様であり、課題はさらに山積しており、答えは直ぐには出ないのだと知るようになる。

このとき問題を考え続けていくために、学生たちに与えられている道具が法学である。こうして専門的知識の修得に向けて動機づけがなされるが、この専門性が幅広く深い教養を導きの糸とするものであることを学生たちは同時に学んでいるものと考えられる。

社会参加意識の啓発に関わる教育プログラムの試み

鹿児島大学 門 久義

1. はじめに

核家族化、少子化が進む日本社会の中で、教育現場では受験勉強が日常化され、知識や情報のみが氾濫して、若者に現実からの逃避感をさえ与える結果となっている。一方、家庭や地域環境の中でも、大人達の社会人としての側面を垣間見ることさえ困難な状況もある。このような現状において、職業人へのステップとして、大学・学部・学科を堅実に選択して入学してくる若者は非常に少なくなってきた。

近年では、大学の専門教育において、専門分野に対する動機付け教育が行われるようになり、それなりの効果が得られつつある。しかし、その内容には職業人としての生き方や仕事の内容、生き甲斐や夢などには無関係なものが殆どである。しかも、出口教育としてのインターンシップ制度やキャリア教育は、専門職の体験や履歴書の書き方などに代表されるスキル教育である。

一般教育において学部横断的に担うべき導入教育を考えた場合、職業人としての意識教育の前に、社会人としての生き方や役割、問題意識、夢などを考えさせる必要があると思われる。このような新しい導入教育は、ある意味では個人の存在の再定義を考えさせる試みであるとも言える。このような観点から、平成 14 年度から「職業人と実践倫理」と「実践的人生論 一私の歩んだ道一」という科目を開設して、「社会参加意識の啓発に関わる教育プログラム」の試行を開始した。今回は、この概略について報告する。

2. 社会参加意識の啓発に関わる教育プログラムについて

本教育プログラムの内容として、以下のようなものを考えている。

- ①職業人はどのような役割と使命を帯び、どのような仕事をしているのか？
- ②職業人として生きるということは、どのような人生であるのか？
- ③社会へ貢献するということは、具体的にどのようなことなのか？
- ④現代社会の仕組の中で、正しく間違いのない日常生活をするために必要な知識は何か？

①、②に対応する科目は、それぞれ「職業人と実践倫理」と「実践的人生論—私の歩んだ道—」である。③の科目としては、「社会参加意識啓発ゼミ（案）」、④では「消費生活問題（案）」、「現代社会の犯罪と病巣（案）」などが考えられるが、③は現在検討中であり、④は今後の課題である。なお、本カリキュラムを編成する際に注意したことは、学生の生き方や考え方に正しい示唆を与え、考えさせるものであること、人生の「ハウツウもの」でないことである。さらに、今後これらのプログラムを充実させる場合に、共通教育科目の中で独自の分野を構成させるのか、教養科目の中に分散して配置させるかという、プログラムの位置付けについても検討しなければならない。

3. 平成 14 年度の試行結果について

本報告は、これらの講義の最後にアンケート調査を行い、その分析結果に基づき試行科目の評価を行なったものである。

3.1 職業人と実践倫理

(a) 授業の概要

「職業人と実践倫理」の教育目標は、「受講学生諸君が職業人の直面している社会の問題や対応を知り、職業観や倫理観を理解し生きることの意義や使命感を再認識すること」である。今年度

の前期に開講し、表1のように学外から6名の非常勤講師と学内の7名の教官により分担して行った。13名の講師が担当した分野は、医療、法曹会、マスコミ、特許・著作権、農業、工業、教育などに及び、学生は毎回レポートを提出してその内容によって評価を行った。初年度は教科書なしで、各講師が授業において参考資料を配布する方式で行われた。対象は全学部学生とし受講者数は274名であったが、工学部学生には積極的受講を指導したために受講者が多かった。毎回の講義終了時にレポート課題を提示して翌週に提出させ、講義担当者がレポートを採点した。成績評価は2/3以上の出席日数の者について、全レポート評点の平均点により点数をつけた。

表1 職業人と実践倫理のテーマと講師

	テ ー マ	講 師
1	日本社会における倫理	種村完司（教育学部教授）
2	農林技術者と倫理	藤田晋輔（農学部教授）
3	法律と倫理	柿内弘一郎（弁護士）
4	放送界における倫理	村上 徳（NHK 鹿児島放送局放送部長）
5	教育現場における倫理	神田嘉延（教育学部教授）
6	少年非行と倫理	笹原正鹿（鹿児島家庭裁判所次席調査官）
7	農業生産における倫理	有川唱次（JA 鹿児島県経済連調査役次長）
8	地域看護における倫理	沖 壽子（医学部教授）
9	著作権・特許と倫理	大井敏民（鹿児島知的所有権センター）
10	医療における倫理	村田長芳（医学部教授）
11	技術者と倫理	野崎 勉（工学部教授）
12	新聞報道における倫理	杉原 洋（南日本新聞社記事審査委員会事務局長）
13	学生生活における倫理	門 久義（工学部教授）

(b) アンケート調査結果（全講義終了時）

授業の最終週に受講学生に対してアンケート調査を行い、新しい教育の試みに対する学生の意識や評価、教育効果などについて解析した。

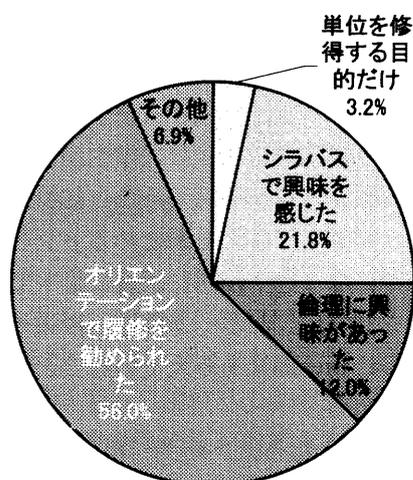


図1 受講した動機

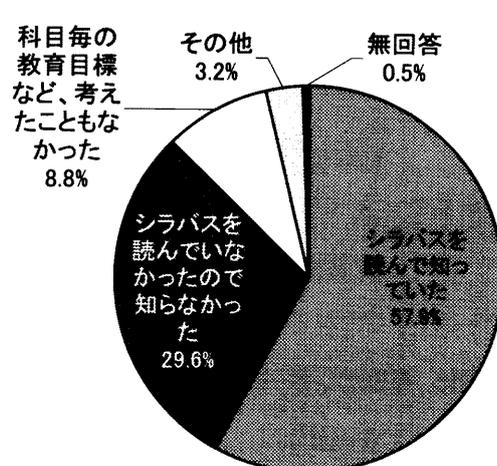


図2 教育目標を知っていたか？

図1の受講した動機を見ると、「シラバスで興味を感じた」21.8%、「倫理に興味があった」12%を合わせて約33%の学生が事前に興味を示していたことがわかる。また、工学部のオリエンテーションで受講するように指導したことが56%という大きな比率で反映していることも注目すべきであろう。教養科目と言えども、必要と考えられる科目についてはオリエンテーションで指導すべきであると思われる。図2のように、受講前にシラバスを読み科目の教育目標を認識していた学生が6割弱というのは問題があるように思われるが、この改善には共通教育の教育目標も含めて、オリエンテーションによる周知・指導が必要に思える。

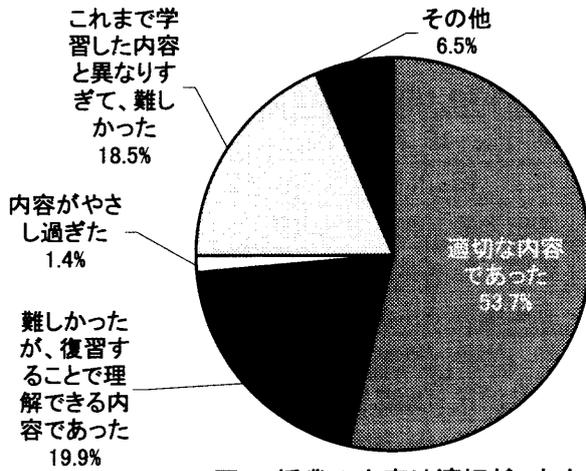


図3 授業の内容は適切だったか

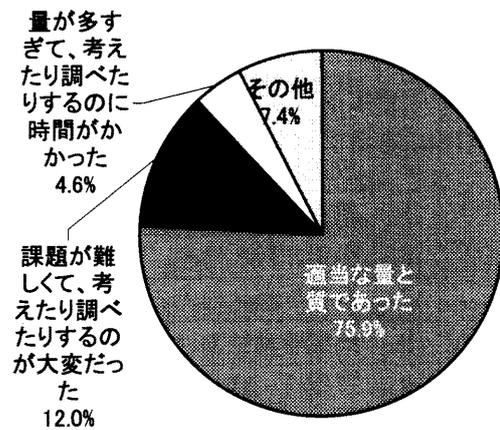


図4 レポートの質と量は適当でしたか

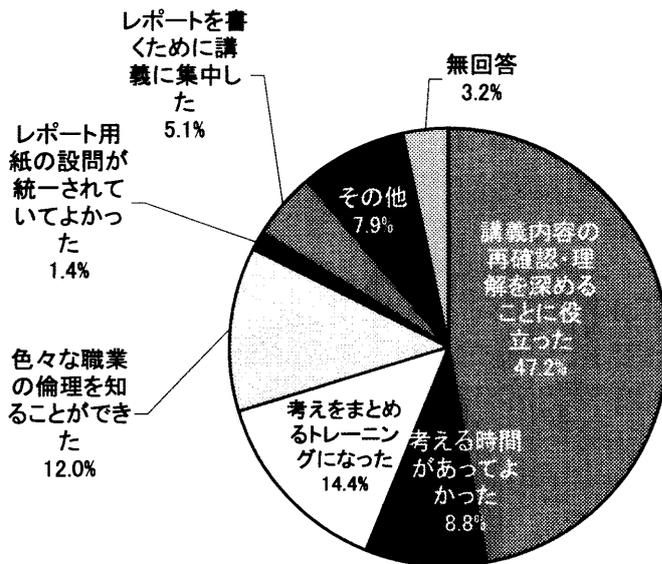


図5 毎回のレポート提出で良かったと思うこと

初めての試行科目であったので、学生が理解できるか、どのように反応するか心配であったが、図3に示すように、内容を理解できたものが73.6%に達していた。また、毎週A4一枚のレポートを課したことに対する反応も、図4に示すように3/4の学生が負担に思わなかったことが意外であった。

レポート提出で良かったと思う理由を図5に示す。約半数の学生が、講義の再確認・理解を深めることに役立ったと評価し、考えをまとめるトレーニングになった14.4%、講義に集中できた5.1%など、レポート課題が授業そのものに良い効果を与えていることを示している。

レポート提出の悪かった面を問う質問では、図6のような結果となった。時間が掛かって大変だったというような内容が多いが、講義内容によってはレポートを書くのが難しいというのが約20%、問題なしというのも20%余りあり、レポートの設問を工夫すればそんなに問題は無いよう

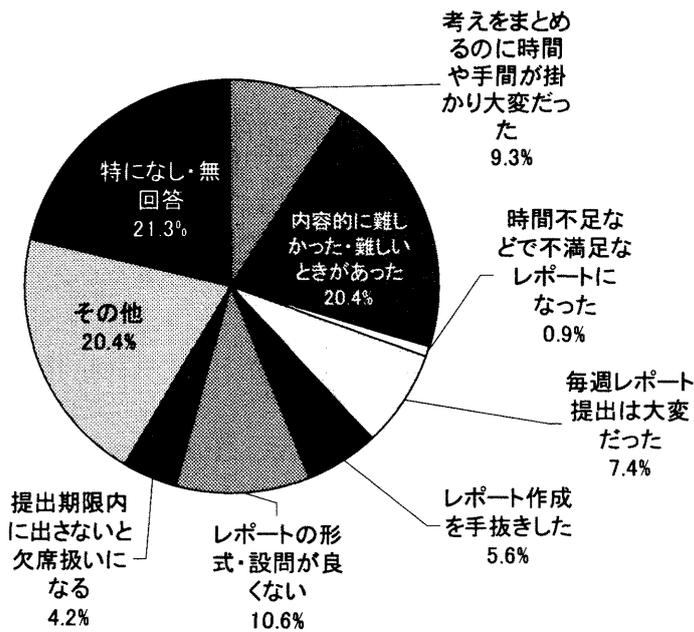


図6 毎回のレポート提出で悪かったと思うこと

に思える。

受講によって「倫理」という言葉にどのような認識の差が見られたかを問う質問では、図7、8のような結果となった。「自分の生き方を律するもの」は約1.5倍、「社会生活に必要なもの」は約1.3倍、「職業人として社会貢献をするための重要な指針」は約2.8倍となっている。一方、観念的な「真面目さ」や「堅苦しい感じ」という認識は、それぞれ1/2、1/7と激減している。倫理観に対する具体的な認識が深まったものと考えられる。

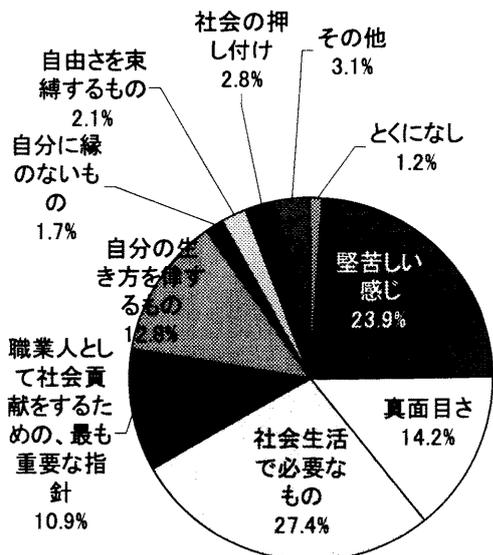


図7 受講する前に「倫理」という言葉で何を連想していたか (複数回答可)

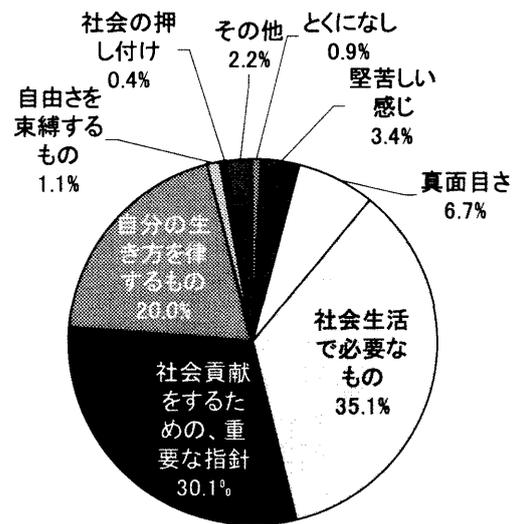


図8 受講後「倫理」という言葉をどのように感じるようになりましたか (複数回答可)

受講学生が日常のどのような場面で倫理観を意識するかを聞いた質問では、図9のような結果を得た。日常生活におけるものと大学の授業での姿勢に関するものが半々となっており、比較的健全な結果と思えるが、残念ながら「職業人と実践倫理」の授業中でも遅刻や早退、居眠りなどが頻繁に見られたのも事実である。

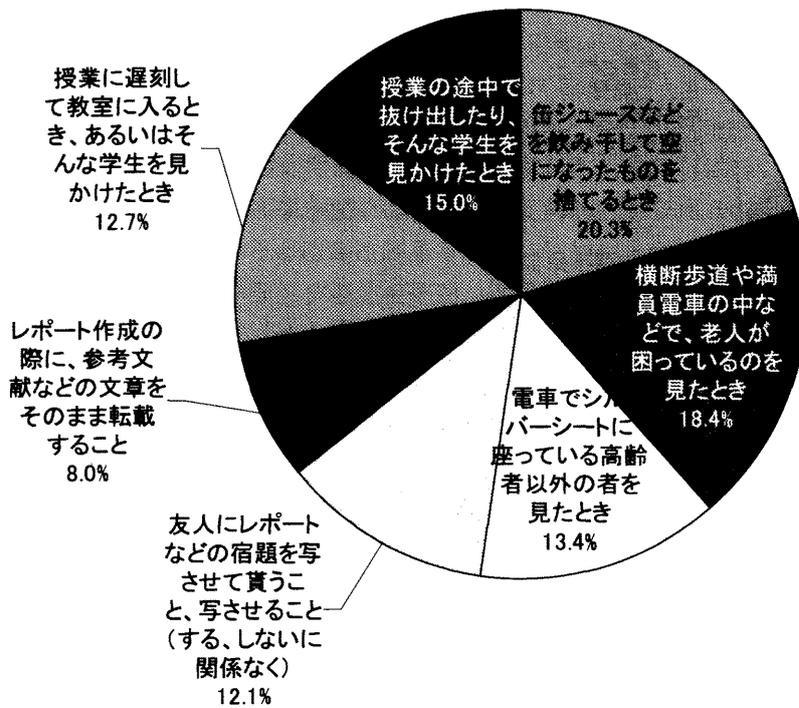


図9 日常生活において倫理(感)を自覚するとき(複数回答可)

職業人と実践倫理の受講によって、当科目の教育目標が達成できたと思うかを問う質問に対して、図10のような結果を得た。73.1%の学生が、達成できた、あるいはある程度達成できたと感じており、大きな効果が得られたと考えられる。特に、「今後の学生生活において、この講義が良い影響を与えますか」という問いには、81.4%の学生が影響を受けたと答えている。

大学の教員だけではなく、社会人の講師によるこのような講義は、学生に大きな刺激を与え、か

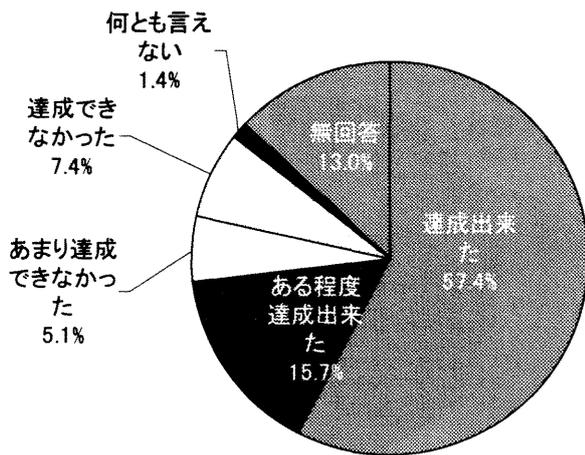


図10 教育目標を達成できたと思いますか

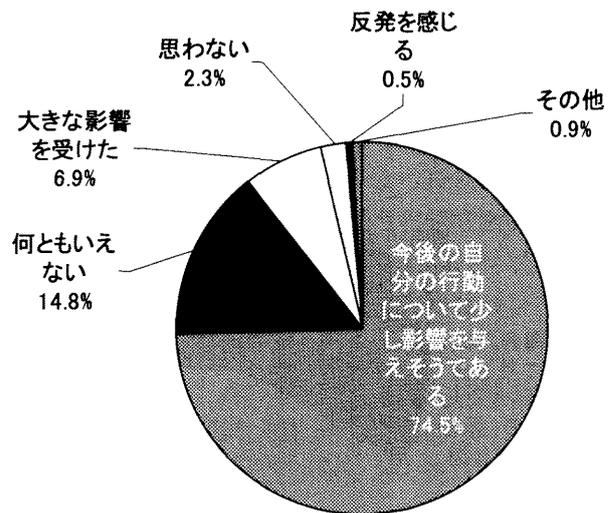


図11 今後の学生生活において、この講義が良い影響を与えますか

つ教育効果が上がることが明らかとなった。

以上のような受講学生に対して、13名の講師(学内7名、学外6名)がどのような成績を付けたかを表2に示す。各講師のレポート評価を集計した立場から感想を述べると、レポートの内容に対する採点は比較的厳しく妥当に感じた。その結果、優91名、良89名、可+不可(94名)とほぼ三分になり、40名の不合格がでた。

表2 成績評価の結果

評価点	人数	評価	人数
80点以上	91	優	91名
70点以上 80点未満	89	良	89名
60点以上 70点未満	54	可	54名
50点以上 60点未満	8	不可	40名
40点以上 50点未満	3		
30点以上 40点未満	4		
20点以上 30点未満	25		
20点未満	0		
計	274		274名

3.2 実践的人生論—私の歩んだ道—

(a) 授業の概要

「実践的人生論—私の歩んだ道—」の教育目標は、「…(中略)…講師の体験談を通して、現実の社会が抱える問題点とそれを現場の中で解決していく試行錯誤のプロセスを学び、あわせて人生の喜びや感動を知る。この講義から学生1人ひとりが自分のこれからの人生を考え、人生目標を具体化する方法を学ぶ」ことである。9名の学外講師により10回の集中講義を行った。教科書、参考図書は特に指定なく、授業は一日2講義をしてその後にレポートを書く時間を1コマ設け、その日の内にレポートを提出させた。1日3コマで5日間、計15コマの集中講義である。

受講対象は全学部学生とし、成績は出席とレポート評点により評価した。講義担当者とテーマを表3に示す。

表3 実践的人生論のテーマと講師

	テ ー マ	講 師
1	ピンチはチャンス…困ることが新たな展開となる	堀口泰久
2	エンジン開発35年	黒木秀雄
3	人生における自己受容	野村浩志
4	酒づくり・夢づくり	鮫島吉廣
5	司法試験と家族	野平康博
6	国際化の中で生きぬくために	古木圭介
7	歴史に学んだ国際研究	川島真人
8	人生はいちまいのジーンズである	松元兼俊
9	人間として～ハンセン病の向こうに	陶山賢治
10	人間として～ハンセン病の向こうに	陶山賢治

(b) アンケート調査結果(全講義終了時)

授業の最終週に受講学生に対してアンケート調査を行い、新しい教育の試みに対する学生の意識や評価、教育効果などについて解析した。

実践的人生論は夏季休暇中に集中講義で行ったことや、入学時のオリエンテーションでは履修を勧めることもなかったため、図12に示すように受講動機は内容とあまり関係がなかった。したがって、図13に示すように事前にシラバスを読んでいる学生も30%程度であった。しかし、受講

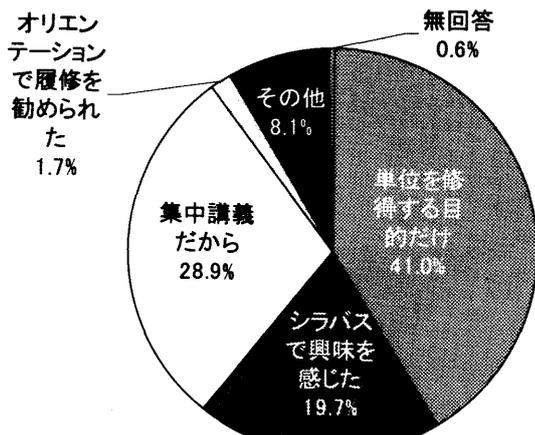


図12 「実践的人生論」を受講した動機

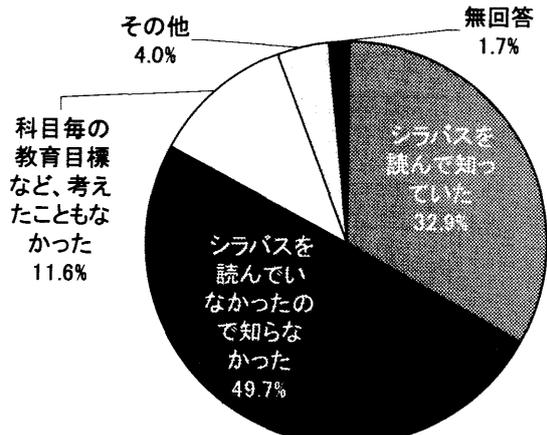


図13 「実践的人生論」の教育目標を知っていましたか

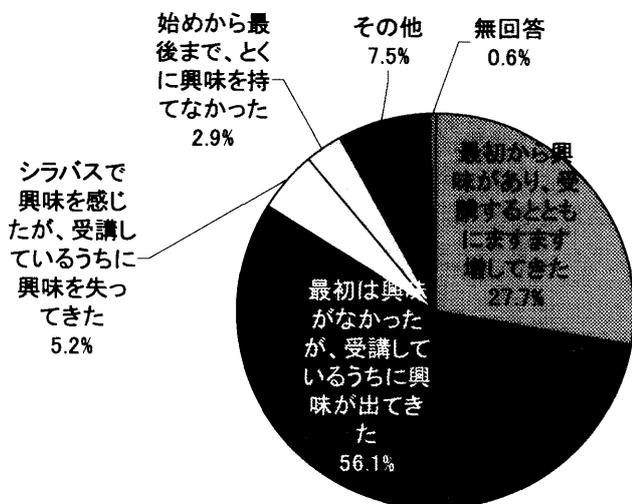


図14 この授業に興味がありましたか

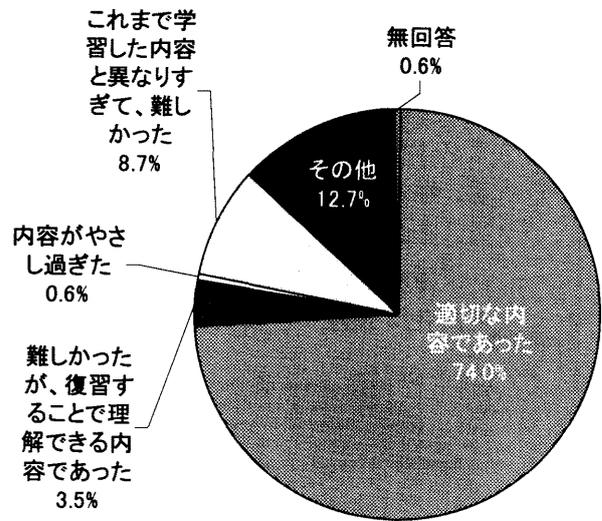


図15 授業の内容は適切でしたか

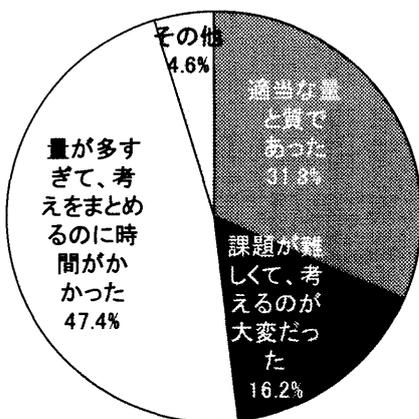


図16 レポートの量と質は適切でしたか

する間に興味が出てきたもの56.1%、ますます興味が増したもの27.7%で、計83.8%の学生が本講義に興味を持ち続けたことが図14から分かる。

図15によると、内容については適切な内容であったという意見が3/4あり、易し過ぎたというものは極くわずかであった。むしろ今まで学んだことのない話であったので難しかったというものが8.7%あった。これは興味深い点であると思われる。

レポートは、その日の講義二つについて3限目にそれぞれ二つのレポートを書き提出するこ

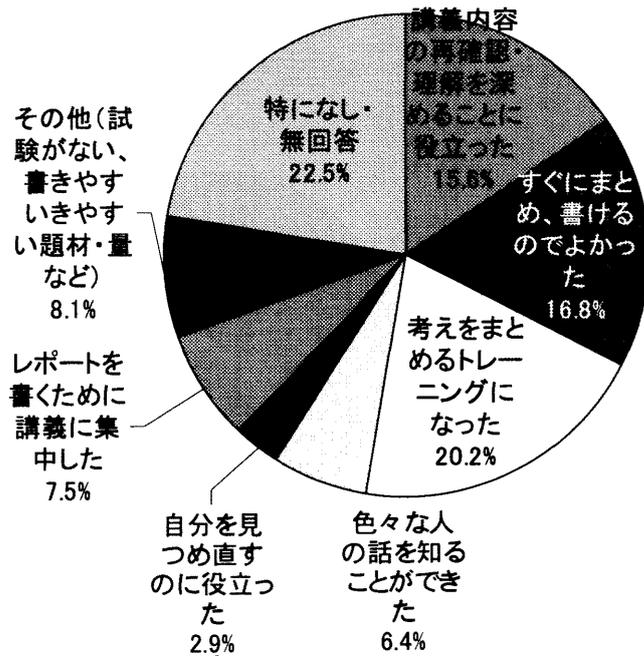


図17 毎回のレポート提出で良かったこと

とになっていたので、講義終了後に引き続き教室で熱心にレポートを書いていた。このようなレポート提出方法について、良かったと思うことを質問した。図17を見ると、講義内容の理解を深めることに役立った15.6%、考えをまとめるトレーニングになった20.2%、講義に集中した7.5%などのレポートの効用を唱える意見が約46%もあった。反面、すぐに書けるのでよかった16.8%、その他(試験がない等…)8.1%の、試験よりもレポートの方が楽(?)というような意見も約25%に及んだ。

レポート提出の良くない点を問う質問では、図18のような回答が見られた。これらより、講義を聞いてすぐに考えを文章まとめることや、文章化する訓練が不足していることが伺える。

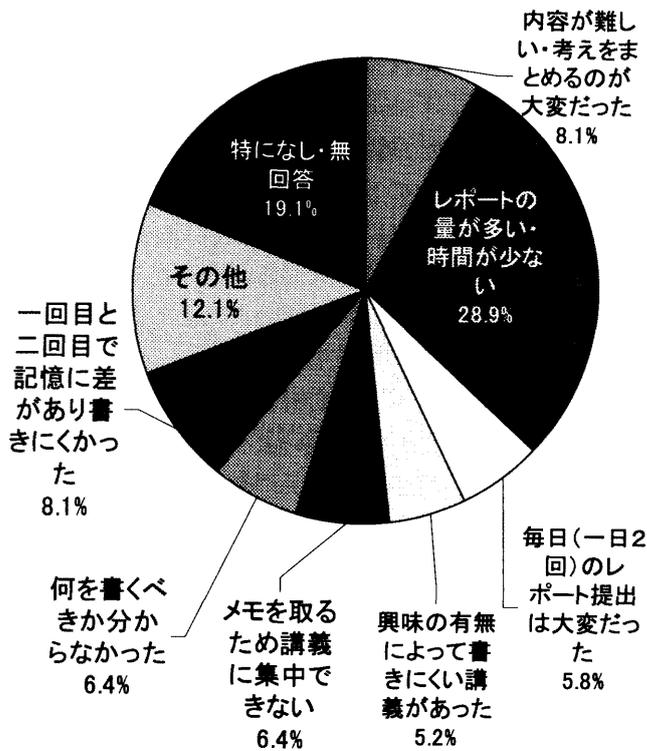


図18 毎回のレポート提出で良くなかったこと

図19、20の比較により、受講前後で「人生論」という言葉の捉え方がどのように変わったかを知ることができる。それによると、職業人と実践倫理ほどの大きな変化は見られないが、「堅苦しい感じ」とか「真面目さ」というような観念的な認識が減少して、「生きていくために必要な知識・経験」や「社会生活に必要なもの」などのより具体的認識に変化していることがわかる。

最後に、「今後の学生生活においてこの講義が良い影響を与えますか」という質問に対して、87.9%の学生が影響を受けた、あるいは受けそうであると答えている。社会人による「実践的人生論」が、学生に広く受け入れられ教育成果を上げていくものと推測される。

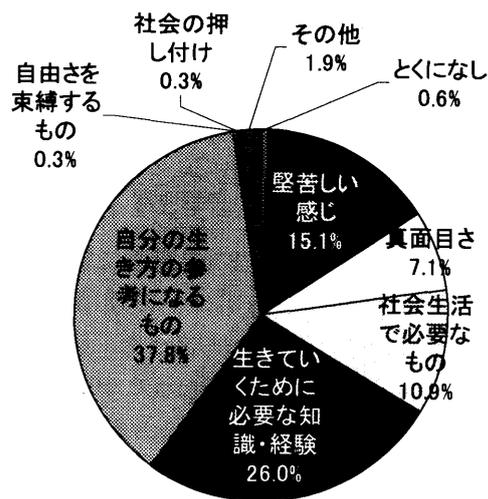


図19 受講前には「人生論」という言葉で何を連想していましたか(複数回答可)

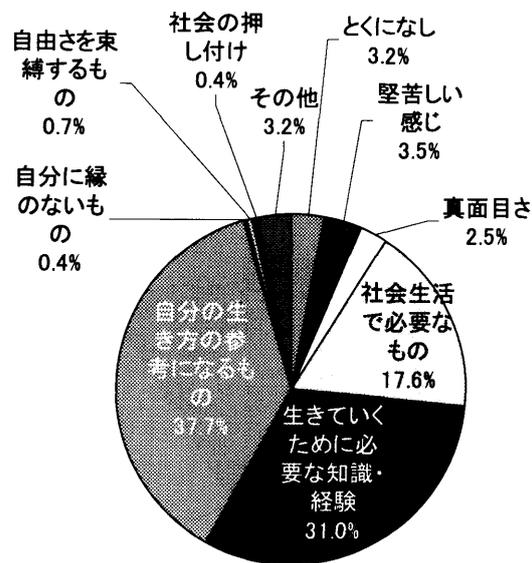


図20 受講後、「人生論」という言葉で何を連想しますか(複数回答可)

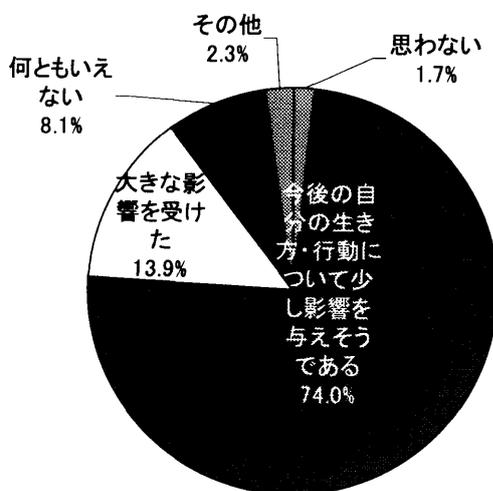


図21 今後の学生生活において、この講義が良い影響を与えようと思いますか

4. おわりに

大学1年生に対する社会参加意識の啓発を目指した新しい導入教育の試行を実施し、その評価を行った結果、以下のような結論を得た。

- 社会参加意識の啓発に関わる教育プログラムは、受講学生の80%以上が、興味があると言い、またその良い影響力を感じていた。
- 実社会の具体的な問題と取り組みなどについての授業、あるいは社会人による講義は、学生に強い教育効果を生む。
- 毎回、レポートを書かせるという手法は、学生自身実感として次のような効果がある。
 - ・講義内容の再確認・理解を深めることに役立つ
 - ・考えをまとめるトレーニングになる
 - ・講義内容を再度考える機会が得られる
 - ・レポートを書くために講義に集中できる

以上のような視点で、社会参加意識を啓発する教育プログラムを充実させることは、今後大きな意味と成果を生むものと思われる。文頭にも述べたように、若者が現実から逃避するのではなく、実社会へ積極的に働き掛ける意欲を見だし、自身の存在意義を掴み取るような生き方を考えさせる新しい教育プログラムを是非とも開発したいと思っている。

大学入門教育について－沖縄大学（法経学部）の場合－

沖縄大学 土田 武信

1 はじめに

どうしてなのかわからないが、私をはじめ沖縄大学の教職員は一般に、これまで、この「九州地区一般教育研究協議会」の存在を知らなかった。しかし、私どもも、同協議会が担うテーマについては、これまで、「教養」科目にかかわる先生方を中心に、各種の取組みが行われてきたし、大学教育学会には毎年、少なからぬ教員が出席、また、その全国大会も沖縄大学で開催されたこともある。

この度、九州地区一般教育研究協議会がはじめて沖縄（琉球大学）で開催される機会に、沖縄大学の加盟準備、そして、沖縄大学からの教員としては、はじめて、ご報告することになった。

さて、沖縄大学（法経学部）での「大学入門教育」について、私の個人的認識に基づいて、その概要と課題を述べてみたい。

2 沖縄大学のこと

- 1) 沖縄大学は、那覇市（人口約 30 万）内にある社会・人文系の 4 年制大学で、近時、連続的に、改組転換が行われた。その改組転換までは、法経学部（法学科と経済学科）と短大部英語科（昼間部 100 名、夜間部 100 名）だったが、法経学部法経学科（2 学科を 1 学科とし、定員は同じ昼間部 100、夜間部 100。1997 年度スタート）と、人文学部国際コミュニケーション学科（昼間部 150、夜間部 100）、同学部社会福祉学科（昼間部 80、夜間部 50。1999 年度スタート）となった。
- 2) 復帰（1972 年）をはさんで、厳しい状況（存続問題や給与の遅配、欠配等のごとし）の下に立たされた沖縄大学での、大学づくり（教育改革）は、1980 年前後に遡る。「地域に根ざし、地域に学び、地域と共に生きる開かれた大学」という基本理念を掲げての、ペーパーテストを廃止した面接重視の入試改革をはじめ、4 年間一貫ゼミ教育（1 年生：教養ゼミ〔当時〕、2 年：基礎ゼミ、3・4 年：専門ゼミ）、地域研究関連科目の拡充、単位互換制度の活用、就職指導の強化、そして、一般市民対象の社会教育活動（「土曜教養講座」が中心だが、那覇市からの助成も得て、374 回を数える）等々は、今日もなお、基本的に維持されてはいる。
- 3) 入口段階での教育活動（大学入門教育）を重視するという姿勢も、その面接重視の入試改革時に遡る。その後、推薦入試の工夫（課題図書導入）に加え、最近の指定校制度や A O 入試導入後は、「プレ・キャンパス」など「入学前教育」という課題にも直面している。

3 大学入門教育の概要

1) 入学前教育

課題図書や課題テーマ等の課題提供、あるいは、いわばプレ・キャンパス企画の実施。この

プレ・キャンパスは、大学案内・入試説明会の延長線上にあるオープン・キャンパスではなく、一般入試A・B日程（2、3月）前に実施されるAO入試や推薦入試、指定校制度による入学手続者に対する入学前教育の取組みである。

従来型の推薦入試（沖縄大学は11月）や、AO入試（I期とII期とがあり、I期の申込み時期は7月）の早期化は、中等教育の正常なあり方を歪めてはいまいか。入学前教育では解決不能な問題性を学んでいると思われる。志願者の争奪戦が展開されているなか、入試のあり方が、改めて、問われている。

2) 新入生教育

【入学式記念講演】

型どおりの入学式に引き続く、学外者を招いての講演会の実施。もう20年つづいている。

【基礎学力テストとオリエンテーション】

国語、英語、数学の基礎学力テスト（指導上の基礎データをえるために行われる）実施日を含め4日間のオリエンテーション。学外での宿泊を伴うオリエンテーションの実施（国際コミュニケーション学科）または検討中（法経学科）の学科もある。

【カリキュラム（*印、必修科目）】

下掲は、受講年次を1年生に限定した科目だが、このほか1・2年生を受講年次とした科目も少なくない（たとえば、*コンピュータ入門、*「社会と統計」または「くらしの数学」〔情報処理〕、人文系、社会系、自然系科目〔基礎科目〕）。

- ① *問題発見演習（1996年度までの旧・教養ゼミ時代は選択科目）（基礎科目） ちなみに、2年生：基礎ゼミ（必修）、3または4年生：テーマ演習（必修）
- ② *日本語のシステム、*外国語（英語、中国語、スペイン語、日本語を母語としない学生用の日本語、から一つだけ選択必修。以上、言語）（この言語と前出・情報処理とを、コミュニケーション・リテラシーとしてまとめている）
- ③ *法学概論、*経済概論、*経営概論、民法財産法Ⅰ、沖縄経済・企業論入門（基幹科目）

【補習カリキュラム】

「就職関連科目」のなかに位置づけられているが、いわば「補習授業」の内容をもつものとして、教養国語と教養数学とを開講し、新入生にもその受講を推奨している。これらの科目と、前出・日本語システム（必修）や、前出・「社会と統計」「くらしの数学」（選択必修）との連携は、必ずしも十分ではない。

3) 科目登録

オリエンテーション日程中の登録相談に加え、履修科目登録受付のあと、法経学部全教員が手分けして、新入生を含む全学生の科目登録（必修科目登録の有無等）や非登録学生のチェック作業や、個別指導・相談が実施された（2002年度）。前年度までの、少なからぬ除籍・退学者の出現が、その背景にあっての取組みである（経済的問題を抱える学生も少なくなく、また、少なからぬ学生が通年的にアルバイトをしている）。

ちなみに、登録科目数について制度上、上限の設定や、一年間16単位未満取得にとどまる学生の除籍制度（ただし、厳格には適用されていない）がある。

4) 新入生「担任」

昼間部、夜間部新入生対象の「担任」3名の配置

5) その他

4 現状と課題

1) 2002年度とくに論議（検討）の対象となったのは、必修指定の是非問題（功罪）にも重ねながら、①人文学部との共通科目（基礎科目）でもある「問題発見ゼミ（旧・教養ゼミ時は選択で、現在は必修）」のあり方、②基礎科目（共通科目）、法律、経済、経営それぞれの関連科目（基幹科目ほか）の組み合わせ（バランス）のあり方、だったといえようか。

今年度は、「問題発見ゼミ」必修指定から6年目（法経学部）、4年目（人文学部）であるが、これまで毎年、入学年度において、その問題発見ゼミの単位未取得学生（出席しない等が原因）を多く出してきたなかで（3年生で、問題発見ゼミ、基礎ゼミ、テーマ演習を同時に履修する学生もめずらしくない）、どうするかが論議された（次年度はとりあえず必修科目を継続）。

法経学部改組転換（1997年度）から4年間、前出・基幹科目は全部必修科目だった。その後、選択化の方向で修正が加えられたが、最近では、改めて、必修化への意向が強い。ある科目（ある専門分野の基礎科目）からの必修化の主張は、ほかの科目（別の専門分野の基礎科目）の必修化を促しやすい。

大学の理念（前出・「地域に根ざし、地域に学び、地域と共に生きる開かれた大学」）の学部教育（カリキュラム）における具体化論議の積み重ねのなかからしか、答えはでてこないはずなのだけれども、各スタッフの専門領域の調整は難しい（新任採用等人事問題で象徴的に現出する）。2) 国際コミュニケーション学科（人文学部）では、アドバイザー制が採用されている。アドバイザーが担う任務については、かつては、問題発見ゼミ（旧・教養ゼミ）や基礎ゼミ（2年生）などゼミ担当者に期待されたところと思われるが、学生がもっとも相談しやすい環境（制度）づくりが望まれる。

3) さて、前述の、少なからぬ退学・除籍者数の出現は、欠席が少なくないという状況の分析がまたれることは言うまでもないが（背景に経済的問題もあろう）、教育サービスに起因するところが多いと思われる。沖縄大学でも、FD（Faculty Development）またはSD（Staff Development）の取組み（「授業内容・方法を改善し、向上させるための組織的な取組み」）の必要性がつとに叫ばれてきている所以である。

とりあえず、私にとって、とくに気になる事項について次に列記してみたい。

・学生の自発（自主）性や個性尊重（いわば「課題発見力」の育み）と、「基礎学力」とは相互作用の関係にあると思われる（必修科目のあり方問題とも重なるか）。

・ほめることや激励の必要性（これは、对学生に対してだけではなく、私たち教員相互間においてもあてはまる。）

・語彙、抽象的思考等で、多様な学生に対する「教育法」の改善・工夫（FD）の必要性と緊急性

・「能力」に応じたクラス分けの功罪（教育観にもかかわる問題でもあり、「効率」がよければいいのか）

・「学び」の意義を、いかにして提示できるか否か、にかかっていると思われる。分かる授業や、

興味深い講義には、学生の集中力も違うのは、私たち等しく体験してきていることである。

・ 動機づけ（自己発見）、感性の豊かさ、「モラトリアム」の活用

4) 最後に、そのFDの本格的取組みのためにも、沖縄大学にも、FDの取組みをはじめカリキュラム改革、学生による「授業評価」業務の管掌、あるいは、学生からの相談窓口等を担う「大学教育委員会（センター）」づくりが期待されることも強調しておきたい。

なお、2003年2月15日、知識注入型教育から獲得型教育への転換をつとに主張されてきている渡部淳氏（国際基督教大学〔ICU〕高校教諭）を招いての講演会「いま、改めて問う 知識注入型教育から獲得型教育へ～「学力低下」問題と「総合学習」の課題～」（主催：沖縄大学地域研究所・大学教育研究班）を予定している。

短期大学における表現技法とコンピューターリタラシー

沖縄キリスト教短期大学 大城 亘武

はじめに

読まない・書けない・考えない、が経済学者・大石力氏の1980年前後の大学生評である。日本一「かしこい」と思われている東大生に対してである。「かしこい」の対極にある短期大学関係者としては、鼻白みたいところだが、東大生でこうであれば、まして我が短大では、と一念発起して、新科目『表現技法』を1982年に立ち上げた。新入生全員必修の、従来『国語表現法』とかと呼ばれていたものの内容を、読める・書ける・考える、技能の涵養に切り替えた。精読、要約、論評、ブックリポートを主な内容とする。

また、情報通信技術の急速な進歩には、デジタル・デバイド（情報格差）現象を引き起こす懸念がある。まして、学生のほとんどを「機械に弱い」女性が占める本短大では、懸念どころか実態でありうる。家電並にコンピューターを使いこなす技能習得を目指して新入生必修の科目『コジコンテンツの作成までを一通り学習する。』

では、学生たちは、読み・書き・考えるようになり、コンピューターを自由自在に駆使するようになったであろうか？

1. 本学の概要

本・沖縄キリスト教短期大学は、1957年（昭和32年）に創設され、1959年（昭和34年）にキリスト教学科（1970年に廃止）、1963年に英語科と児童福祉科（1967年保育科の設置に伴い廃止）が設置され、現在に至っている。

沖縄キリスト教短期大学の特色は制度的には次のように概括される。

- ①英語科（入学定員250人）、保育科（入学定員100人）の2学科を有する。
- ②大学（短期大学）設置基準の改正による、いわゆる大綱化の波に抗して教養課程の組織を維持する。（「総合教育系」と呼び、専任教員4人を配置する）
総合教育系では、キリスト教学、表現技法、コンピューターリタラシーを必修とする。
- ③いわゆる教養科目も少人数（50名以下）で運営する。
- ④授業科目は Semester制（前期、後期）により、1学期で完結する。
- ⑤4月、10月入学制を採用する。（卒業式は3月と9月に行われる）。

2. 「表現技法」について

伝統的には、国語表現法等と呼ばれ英語科に置かれていた科目を換骨奪胎して、米国の大学等で「フレッシュマン・イングリッシュ」として教えられている内容に改組転換したものを「表現技法」とした。英語科のファカリティに米国留学者が多数いたことが英語科の賛同を得るのに幸いした。ただし、保育科スタッフの間では過重負担を理由に反対するものが少なくなかった。

保育科学生は幼稚園教員免許と保育資格の両資格を取るため取得単位数が極端に多く、必修科目追加は避けたかったのである。激しい議論の応酬の後、英語科、保育科両科の新入生必修の科目として位置付けられた。1982年の4月にスタートし現在に至っている。

表現技法の目標：

明確で適切な表現力と理路整然とした論述力を身につける。

表現技法の内容：

- ①精読：テキストを徹底的に分析批評しながら読む。日本人であれば日本語が読める。日本語が読めるなら、その内容が把握・理解できる、という思い込みを突き崩す。
- ②要約：A5サイズの4ページ前後のテキスト（論評文など）を読み、90分の1単位時間内に400字で要約を完成する。テキストの概要把握とその要約表現を試み、磨く。
- ③論評文：A5サイズの4ページ前後のテキスト（論評文など）を読み、400字4枚で批判的に検討する。その際、引用の技法、参考文献リストの作成方法等も学習する。
- ④ブック・レポート：新書版程度の著作物を（指定された40冊ばかりの中から）1冊選び、該当書についてレポートする。読む楽しさ（苦しさ？）と共に選書眼の育成を目指す。3枚。
- ⑤テキスト：沖縄キリスト教短期大学総合教育系（編著）2001『新・表現技法』沖縄キリスト教短期大学総合教育系。テキストは1986年の初版から改定を繰り返し、現在に至っている。作文嫌いの学生は多い。クラスの最初で図書館とタイアップした図書館ツアーや図書館利用に関するビデオ鑑賞などがあり、「楽勝」の気分が漲る。「精読」にいたって「国語辞典」を持参するよう言われ、高校時代までの「国語」の雰囲気は漂う。最近は「電子辞書」持参派が増えつつある。ここまでは、まあ高校の延長の気分があるが、分析的な内容把握に及んで「国語嫌い」が頭をもたげてくる。「要約」作業に入って、気分が改まる。本学では、要約を内容の要点把握ではなく、原著の再構成である、と位置付けている。テキストを読む。内容を把握する。再構成して90分の時間内に400字で要約して提出する。高校生ではなく短大生であることの自分のポジションに気付くことになる。そして、ストレスを覚えるようになる。添削も大変だ。

「論評文」はおそらく、短大に入学して初めて取り組む課題である、と思われる。入試等の準備の為に小論文の経験を持つものは少なからずある。しかし、具体的なテキストを前にこれを批判的に検討するなどの経験はあまり無いはずだ。しかも、原著者の主張や考えを「自分の思い」だけで批判するのではなく、ちゃんとした文献的根拠を示し、引用し、論を構成するという作業が伴う。批判することは反批判を想定していることなどスリリングな営みである。

最後の課題は「ブック・レポート」である。文芸作品等の情に訴える著作ではなく認知文を用いる。趣味としての読書とは別の読書を想定している。短期大学で学ぶための必須の読書技法の獲得を目指している。

2002年前期には13クラスを開講し7人の教員が担当した。クラスサイズは、ほぼ30人であった。「表現技法」について、同年7月上旬に実施された学生による授業評価の結果の1部をつぎに掲げる。評定法はQ11、Q11については、1：まったくそう思わない、2：そう思わない、3：どちらともいえない、4：そう思う、5：非常にそう思う、Q17については、1：わからない、2：不可、3：可、4：良、5：優、とした。

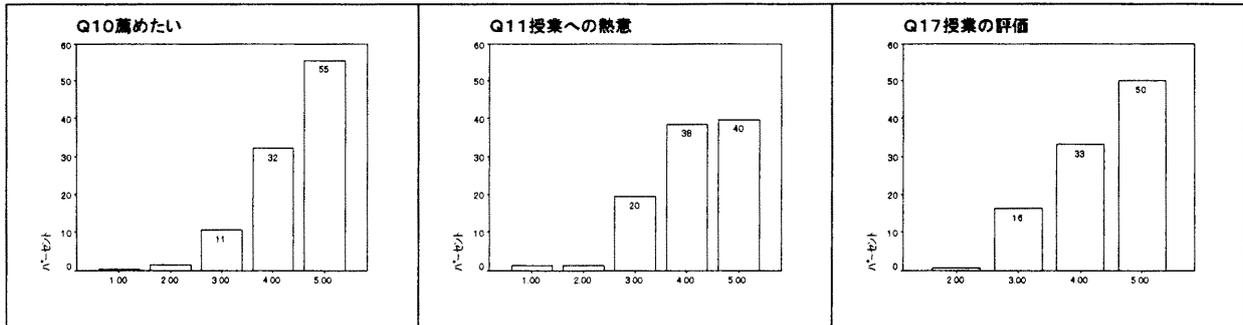
設問はつぎのようになっている。

Q10 私は、この先生のこの科目は素晴らしいと思いますので、他の学生や他大学の学生にも受

講するように薦めたい。

Q11 私は、この科目に熱意をもって取り組みました。

Q17 この授業を全体的に評価して下さい。



Q10は、本学が自信をもって開講するこの科目に学生達がどの程度自我関与しているかを観るためのものである。前ページの左の図にみられるように、ぶっちぎりに高い自我関与のあることが分かる。およそ88%もの学生が他大学学生へ受講を薦めていることになる。

Q11は、学生自身のこの科目への参加の度合いを調べるものである。前ページの中の図に見られるように、これもほぼ78%もの学生が熱意を持って取り組んだという結果である。

Q17は、授業評価の視点にはいくつもの観点が考えられるのだが、総合的にはどうなのかを問うている。結果は、前ページ右の図に見られるように、50%の学生が最高の評定を与えている。「わからない」とした者は皆無であり、「不可」の評定をした者は2人(0.6%)であった。

授業終了後の「感想文」によると、要約や論評などは短期大学に来て初めて学ぶことなので戸惑いが多いこと、ブックリポートでは今までの読書量の少なさを痛感する声ほとんどである。なお、英語科学生の場合、英語を勉強するために来たのになぜ日本語なのか、と憤慨する声も少なからずあるが、日本語で出来ないことが英語で出来るはずがない、ことに気付くようである。

また、「表現技法」のクラスは、どちらかといえば「労の多い」科目である。単位を落とすようなことになって、2度同じような苦勞をくりかえしたくないという一念で必死に勉強した、との記述が散見される。そうであってみれば、上の評価を意外な結果である、と考えられる。「楽しんで良い結果を得る」という風潮があり、この科目はこの趣旨に反するからである。にも関わらずこのようなよい評価を与えられたことはこの科目の「力」が認められたことを証するものであろう。

3. コンピューターリタラシー

コンピューターリタラシーは、本学コンピューターのネットワーク化およびインターネット接続とともに1997年4月から、全新入生必修の科目としてスタートした。本学は、短期大学であるということとも相俟って入学者は圧倒的に女子学生が多く、社会的ステレオタイプとしての「女性は機械に弱い」に鑑み、デジタル・デバイド状態を脱却すべく、つぎのような目標、授業内容を設計した。

目標：

コンピューター関連の①知識を習得し、②技能を獲得し、③学習において日常的にコンピューター

ーを駆使するための基礎的技能を養成する。まず、コンピューターリタラシー、すなわちコンピューターに関する基本的知識・操作技能を修得し、究極的には情報を自由に検索、享受、処理、加工、創造、発信が行えるような情報リタラシーを育てる。

内容：

運指技能（もぐらたたき、カッコ内は使用ソフト名である、以下同じ）、文書作成（MS-Word）、電子メール（EudoraPro）、インターネット（Internet Explore）、ホームページ（IBM ホームページビルダー）、表計算（MS-Excel）、描画（キドピクススタジオ）等。

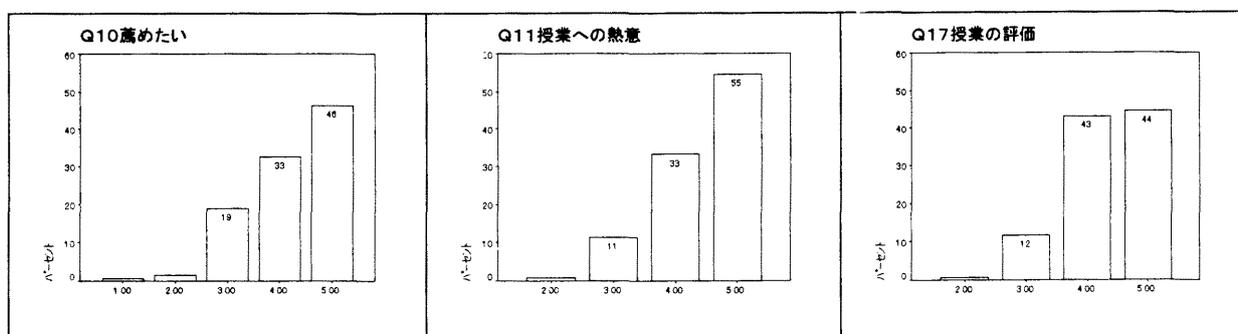
2002 年前期には 12 クラス開講し、4 人の教員が担当した。最初の授業の後でのアンケート調査によって、コンピューター関連の受講生の背景を探った。380 人のデータが回収された。その結果について概略を述べる。

自宅にパソコンがあるのは 198 人（52%）、パソコン経験がある者 229 人（60%）であった。パソコンがあるというのは家族の誰かが所有しているということが主であり、個人用として保有していることを意味しない。また、パソコン経験についていえば、小学校、中学校、あるいは高校での授業で「触ったことがある」といった程度のことである。1 人 1 台といった使用経験でもなかった。

つぎにパソコン関連の取得資格について述べる。ワープロ検定については、1 級 7 人（1.8%）、2 級 19 人（1.8%）、3 級 31 人（8.2%）、4 級 13 人（3.4%）であり、合算すると 70 人（18%）となる。情報技術は 1～3 級を合算して 24 人（10%ばかり）、Excel は 6 人（2%に満たない）である。これらの資格を所持する者は専門高校（商業高校など）出身者である。

自由記述によって、この科目に期待することを調べると、なにより多いのが「すらすらとコンピューターが使えるようになりたい」というものである。上述したようにコンピューター関連の何らかの資格を所持する者が総じて少ないので、漠然とした期待を表明するしかないようである。その延長上にインターネットを使いたい、メールを送りたいという期待が表明されている。

2002 年 7 月上旬に実施された学生による授業評価の結果について述べる。337 人分のデータについての結果である。設問項目は「表現技法」の場合と同じである。



Q10 他の大学の学生にも薦めたいというのは、この短大が提供する科目の優位性の意識である。こんな凄い科目があるぞ、との一種の誇りの表明である、と考えられる。あるいは、本学にはこんな素晴らしい教師がいるぞ、との自慢であろう。約半数に近い学生が「非常にそう思っている」としている。「そう思っている」と合算すると約 80%に達する。

Q11 授業に対する学生自身の熱意は、極めて突出し「非常にそう思っている」のは55%、また「そう思っている」のが33%あり、合算すると約90%に近い。すなわち、この科目は学生達にとって極めてインセンティブが高いことがわかる。特にインターネット関連(ホームページの閲覧、電子メール)は、操作方法さえ習得すれば後は自由自在に運用することができる。有用性が直ちに確認できるし、日常生活に必要で便利な知識・技能であることに因るだろう。つまり、これらのことは、高い動機づけとなっている。ただし、有用ではあるがすぐに転用可能な知識・技能には属さない表計算(Excel)については、回避する傾向が自由記述の評価から読み取れる(データは割愛)。また、情報倫理やセキュリティについての講義内容は座学であり、興味をひかないようである。

なお特筆すべきは、運指技能の修得を目指す「もぐらたたき」への動機付けの強さである。これはキーボード練習であるが、学生達は喜喜として取り組んでいる。課外に1回あたり15分、8回トータル120分の練習を課題とした。このソフトはミスタッチ回数、ワンタッチあたりの所要時間を表示する。したがって、1課題分の操作が終わったら直ちに成績が表示され、学習進捗度が自己確認できる。スキナーのプログラム学習の理論の1つ、即時確認の法則に合致し、学習意欲を高めていることが示唆される。なお、スピードの目標を0.3秒台に設定している。120分の課外練習が終わったところで、0.3秒台を達成したものは15%である。25パーセンタイルが、0.46、50パーセンタイルが0.59である。従って半数の者は0.6秒以内のレベルに達している。この数値は、ミスタッチなしの条件下におけるものである。

Q17 授業への全体的評価は、「優」としたものが44%、「良」とした者が43%である。両者を合算すると約87%となる。「不可」とした者は0.6%ある。かなり良い評価である。公式の授業評価とは別に自由記述で授業評価を求めたところ、インターネットへのアクセスが出来たことに喜びを表明するものが多く見られた。また、コンピューター操作技能の習得の外、もっとコンピューターの仕組みや歴史、プログラミングや本格的なホームページの作成など、より進んだ学習を志向する意見が見られた。

おわりに

表現技法、コンピューターリタラシーの2科目は、本学総合教育系が気合を入れて開設した科目である。満足度が高く、生きる上で基礎的素養の核となりうるような科目を夢想した。学生による授業評価を見る限りでは、かなりの高い評価を得ているようである。

学生達は、書くことへの自信を表明し、しかしながら読書量の少なさを反省し、批判的な目で著作物を読むことに目覚め始めている。さくさくとコンピューターが操作できる日を夢見ている。

学生達は、書く技能を駆使し、稚拙ながらもコンピューターリタラシーを発揮し、レポートや宿題をこなし、書籍やその他インターネットから検索した情報を加工し、電子メールを使用して通信しうようになって来ている。

これらの取得した技能をバネに自己実現を図っていくことを期待したい。

[付記]

第51回九州地区大学一般教育研究協議会(於・琉球大学)において発表の機会が与えられましたことに感謝申し上げます。

参考文献

- 沖縄キリスト教短期大学総合教育系（編著）2001『電腦操典』沖縄キリスト教短期大学総合教育系
沖縄キリスト教短期大学総合教育系（編著）2001『新・表現技法』沖縄キリスト教短期大学総合教育系
大城亘武 1984<<「受講感想文による“表現技法”（論述・作文コース）の評価』『一般教育学会誌』6（1）：2
～6.
大内 力 1979 「わたしの言い分 ダメだなあ！今の学生」『朝日新聞』11月16日

[参考資料]

本学の「表現技法」のような「論述・作文」教育は、日本全国の多くの大学・短大で試みられている。では、本学の教育の特色は何だろうか。なによりも、全学生必修として位置付けていることだろう。文章作法ではなくテクニカルな文章が書けることを目指している。関連する論文が読め、いづれ自身が論文を作成することができるような自立した作文技術、その延長上にプレゼンテーション技能の習得を想定している。つぎに、この表現技法をどのように学んだかを参考までに例示する。なお、この学生は短大現役で沖縄県の教員採用試験に合格、また国立、私立の両大学の編入試験に合格し現在は4大の3年次として学習を継続中である。

表現技法を学ぶ

英語科 1年 山里 孝代

実を言うと私は、本講義を受講する前、表現技法の学習に対して、拒絶反応とも言うべく、強い恐怖心を覚えていた。小・中・高校で12年間も国語表現という分野で、作文の書き方等を中心に学んできたのに、又さらに、英語科にも日本語の表現技法を必修として課する厄介な大学だ、と正直言うとチラッと心によぎったのも事実だ。きっと多くの学生が私のように、文章を書く＝面倒くさい厄介な作業、という法則に洗脳されて、こう思ったに違いない。締切りに追われて、書きたくもない論文を書くこと程、ストレスのたまるものはない。とにかく私は、本講義についていけるが心配でたまらなかった。

最初の何回かの講義は発声練習で始まり、“さすがは噂のGTO*、やることが違うな”と、先制パンチを食らったのが第一印象だった。苦手と思い込んでいた要約の練習も沢山する羽目になった。規定の字数、様式、内容に即して、期限内に間に合わせて文章を仕上げる為に、あーでもない、こうーでもない、まるでパズルにでも取り組んでいるかの様に文章と格闘しなければならなかった。頭をひねりにひねって、毎回提出期限が迫る度に、英語にばかり興味を奪われ、母国語である日本語の学習を疎かにしていたツケを払わされているような思いで、その産みの苦しみを味わう羽目にもなった。

しかし、今ならその目的やねらいが理解できる。その有難さも痛感している。本講義は高校まで習ってきた意見文や感想文等の作文とは全く異なり、要約文や論評文等を自分の考えの中だけで処理するのではなく、様々な参考文献等から事実即して文章を作成することを目的としている。又、外国語を学ぶには、母国語の力、読む、聞く、書く、の基本的な表現技法、そして物事を考える能力をしっかりと習得しなければ、どんなに努力しても語学力は向上しないし、内容のない言葉では人々の心を動かすことも出来ないことを実感した。

現代の学生はテストで文章読解の選択問題には優れていても、いざ実際に自分がそれに対してどのような意見を持っているか、ということを書き出すのは苦手である、といわれている。だから、入試や就職試験といった様々な場面で、小論文等の能力を重視する傾向が強くなってきているのだろう。

先程も述べたが、文章を書く＝面倒くさい、という感じで、極端にそれにネガティブなイメージを持っている人も多い。でも、それを引き起こしているのは、面倒くさいというイメージではなくて、本当は正しい文章の書き方を知らない、ということなのではないだろうか。自分が理解していないことを無理矢理行うことを、大抵の人は不愉快に感じる。実際は、文章を書きたいと思っても、いざ真っ白な原稿用紙に向かうと、どうしていいのかわからないから、諦めてしまっているのかもしれない。

自分にどれぐらい表現技法の実力があるかどうかということは別にして、私は文章を書くこと自体は大好きな人間である。今までに感想文、意見文をはじめ、詩や俳句等の創作を沢山してきた。しかし、学習を重ね、年齢を重ね、経験を重ねていくうちに、私はたいていの物事は一筋縄ではいかないものなんだ、ということに気が付いた。そして、考えれば考える程、言葉はそれを表現しようと、洪水の様に溢れだし、それをまとめて形にするには、物凄いエネルギーと時間を費やしてしまう。時には、自分はただの考えすぎじゃないのか、とまで考えてしまう。だから私にとって、論評文の作成等は、ある意味とても苦しいものであった。まるで「鶴の恩返し」に出てくる、自分の羽を抜いてまで反物を仕上げる鶴の如く、一つ一つの提出物（私にとっては作品として位置付けられるもの）を仕上げるには、必死になって取り組むしか方法がなかった。

しかし、最後の提出物となるブックレポートを仕上げた今、何だかとても”やり遂げたぞ！”という充実感があるのは確かだ。「GTOのしごき、地獄の特訓に耐え、幾度の夜を徹した推敲作業を乗り越え、今、無事にこうして受講後の感想文なんて書いているではないか」と、感動すら覚えずにはいられない。ほんの数カ月前の私は、レポートに表紙を付けることを最初に学び、（内容の良し悪しに関わらず）大学生らしく格好良く仕上がった自分のレポートが新鮮で手放しで喜んでいて、振り返って見れば、あっと言う間だった。

悩んで、考えて、でも一生懸命書くにつれ、表現力豊かな人間になれる様な気がする。文章を書くことにへの拒絶反応を克服し、今、そう思える様になったことが、この授業を受講しての最大の収穫だと思う。又、”書く”ということ、締切りに追われて嫌々取り組んで、ただ単純に、仕方なく文章を作成する作業、という程度で終わらせるのは、とてももったいないことに思える様になった。”書く”ということは、自分と向き合って事実と向き合って、頭のなかで悩んだり考えたりしたものを、言葉に置き換えて表現することで、それ自体が精神的な成長に欠かせないエッセンスになるものかもしれない。

外が明るくなってきた。そろそろ、日が昇ろうとしている。目の下のクマを必死で隠す一日が、また始まろうとしている。私の美容とエネルギーを残らず吸い取っていったGTOには、本当に感謝したいところだ。そして、待ちに待った夏休みだ。今世紀最後の夏が私の十代最後の夏にあたる。この夏に私はいろんな文章を書いてみたい、と思っている。自分と向き合って、事実と向き合って、判断力、恩考力、表現力を磨いて、豊かな人間に成長していきたい。本講義で学んだことを活かして。

*GTO このクラス担当の教師のニックネームである。人気漫画『GTO』からの転用。ちなみにGTOとは、Great Teacher Onizuka の略。

大学入門教育部会報告

琉球大学 黒田 登美雄

琉球大学 浜崎 盛康

大学入門研究部会では、第1日目3テーマ、第2日目3テーマの計6題の研究発表が行われ、第1日目の参加者は30人を超える盛況であった。第2日目には、最後の発表者が終わった後、初日に時間不足で十分に行えなかった質疑応答を含む全体討論の時間も設けて意見交換に努めた。それらの概要について報告する。

第1日目の研究発表

1) 大里栄子先生（福岡国際大学教授）「プレゼミナールの意義と問題点」

福岡国際大学は設立後まもない新しい大学とのことである。新生生の学力低下対策の1つとして、入学時に20名以内のクラスを編成し、各クラスのプレゼミ担当者がアドバイザーを兼ねる。プレゼミの教育内容とその目標は、図書館の利用方法にはじまり大学生活全般の指導・助言が含まれる。具体的な指導内容は、レポートの書き方、口頭発表の仕方、グループ研究法、読書法などについてである。図書館の利用法については、図書館スタッフの協力を得ている。テキストなどは統一したものを使用するが、指導は各教員独自に行っている。プレゼミは、前後期通年で2単位である。成績の評価は、出席、レポート、プレゼンテーション、インターネットの活用等に基づき行っている。プレゼミを始めて2年半経過した時点における担当教員の自己点検評価の資料を基に、つぎのような教育効果と問題点が紹介された。

教育効果としては、プレゼミをとおして学生同士、学生と教員との交流を深め大学生活に慣れさせる。読む、書く、話すなどの基礎学力を高めることに役立ち、自ら学ぶことや、学習に意欲的に取り組む姿勢を促せるなど。問題点としては、クラス指定のため学生による教員の選択ができない。教員による指導の方法が異なることへの不満がある。学生に能力や意欲の差がありテーマの設定が難しいため、授業としての認識が低いなどの点が指摘された。しかし、学生の約70%は、プレゼミは役立つと回答し、今後もプレゼミは継続して欲しいとの要望があることなどが紹介された。

2) 今江正知先生（崇城大学教授）「理系の作文教育」

理系文系を問わず、最近の学生は文章が書けない、読んでも正確に理解できない、まともに話ができない学生が多数派になっている現実に直面し、教える側の教師は困惑している。発表者は、自分が担当している「環境科学」という講義をとおして、読むことも下手で、話すことも、聞かれたことに対して単語をポツンと答えるだけの学生に対しての、作文による実践例が紹介された。学生に書かせる作文の内容は、授業内容と直接深く係わる話題もあるし、あまり関係なさそうに見える話題や、内容よりも考えさせる訓練が目的の脱線した話題もある。以前は、講義の中で学生に質問すると、当を得ているかの外れかは別にして、意見を述べる学生が存在した。そのため、学生を巻き込んだ形で講義を進めることができた。しかし、最近では、「解りません」

と条件反射的に答える学生が増えたので、従来のような授業が成り立たなくなった。そこで、全員に中途半端でもよいからと、自分の意見を書くことを強制してみた。最初は、何を書いてよいか分からない学生が多かったが、強制し続けると、次第に何かを書くように育ってくる。

この場合、正解を求めているのではない。最初は、間違っている、屁理屈でも、でっち上げでもよい。相手を少しでも納得させるように書くことが重要であることを教え、言い続けることが大切である。作文における評価は、「すばらしい」「よい」「まあまあ」「ダメ」程度でよい。大切なことは、学生の作文を読んでやり、そして、ほめてやることが重要である。このような授業は、一見、能率・効率の面では悪いように思えるが、やればそれなりの効果がある。そして、学生が「習っていません」と答えるのは、教師や親にその責任の一端がある。しかし、「分かりません」というのは、学生自身の責任であるということを理解させることが重要であるなどの点が紹介された。

3) 森川恭剛先生（琉球大学助教授）「基礎演習の試み-専門教育から教養教育への架橋-

人を裁くためには、法律学に基づく専門知識の習得は不可欠であるが、それだけでは不十分で、同時に幅広く深い教養に裏打ちされた基礎知識（リーガルマインド）の習得が重要である。こういったものの考え方の基礎知識を養うことを目的とした科目「基礎演習Ⅰ」（前期）及び「基礎演習Ⅱ」（後期）が、1年次必修科目として開講されていることが紹介された。この基礎演習は、1クラスの学生定員が25から35人に対して、教官4名が担当している。学生たちの自主的な調査・討論・発表などを通じたグループ学習が演習の柱であるが、その他に外部講師（嘉手納基地爆音訴訟・ハンセン病国賠償訴訟などの訴訟当事者である弁護士・司法書士）による講演や、ディベート形式の討論、ビデオ鑑賞及び裁判所・刑務所・児童相談所・消費者センターなどの施設見学も組み込んでいる。

グループ学習の主なテーマは、戦後補償裁判を手がかりにして従軍慰安婦問題や日本の戦後責任について考えることや、セクハラ裁判から男女平等の人権を擁護するとは何か等について考えることである。また、国際的な視野を養うための問題としては、オランダの安楽死法、アメリカ合衆国の環境保護運動及びスウェーデンの社会福祉制度などを取り上げている。こういったグループ学習をとおして、何が問題点であるかを見つけさせ、その問題を解決に導くためには考えるべきテーマが山積していて、質疑応答や討論を経ると、その問題解決のための答えは単純ではなく、すぐには出てこないことを悟らせる。そして、新聞・テレビ等で報道され、日々発生しているような社会問題についても、それらの問題を法的に捉え直し、問題の解決を図るためのよりどころとなるのが法学であることを理解させている。入学後間もない1年次の学生に対して、専門科目であるところの「基礎演習」を履修させることにより、法学の専門知識の習得は、幅広く、深い教養に裏打ちされた知的センスにより導き出されることを学生に理解させ、これらの科目が「専門教育から教養教育への架橋」にもなり、同時に、専門教育に向けての動機付けにもなりうることが紹介された。

第2日目の研究発表

1) 門 久義先生（鹿児島大学教授）「社会参加意識の啓発に関わる教育プログラムの試み」

経済的にも豊かになり、核家族化と少子化が進む日本社会にあって、教育現場では受験勉強が日常化され、知識や情報のみが氾濫している傾向にある。大学生活においても、現実から逃避しているように見える学生が増加傾向にある現状が指摘されている。家庭や地域環境の中でも、モ

ラトリウムとして働くことを免除されている学生は、大人たちの社会人として働いている現実を直視することさえ困難な状況にある。このような現状において、職業人へのステップとして、大学・学部・学科を選択して入学してくる学生は非常に少なくなっている。

一般教育において学部横断的に担うべき導入教育を考えた場合、職業人としての意識教育の前に、社会人としての生き方や役割、問題意識、夢などを考えさせる必要があるとの観点から、社会参加意識の啓発に関わる教育プログラムの試みとして開講された2つの科目「職業人と実践倫理」と「実践的人生論ー私の歩んだ道ー」についての紹介があった。

「職業人と実践倫理」という科目は、学外から6名の非常勤講師と学内の7名の教員計13名の講師が担当した。その専門分野は、医療、法曹界、マスコミ、特許・著作権、農業、工業、教育などの分野からなり、学生は毎回レポートを提出して、その内容により評価を受けた。一方の、「実践的人生論ー私の歩んだ道ー」は、9名の学外講師により10回の集中講義形式により行われた。授業内容は、講師1人1人の体験談を通して、現実の社会が抱える問題点と、それを現場の中で解決していく試行錯誤のプロセスを学び、あわせて人生の喜びや感動を知ってもらった。これらの科目の受講者は、主に工学部の学生で、法文学部および理学部からの受講者は全体の約1割（20～30人）程度であった。アンケートの結果、この講義を受けて「自分が変わった」または「意識改革ができた」と回答した学生は、約70%であった。次に興味ある点として、学生の興味を引くテーマは、論理性があるものよりも非論理性にあこがれる傾向があることが報告された。

2) 土田武信先生（沖縄大学助教授）「大学入門教育について～沖縄大学（法経学部）の場合」

沖縄大学は那覇市内にある社会・人文系の2学部からなる4年制大学である。本土復帰に伴い、一時期存続の危機に立たされたが、入試（面接重視）改革や、沖縄研究関連科目の拡充、他大学との単位互換制度の活用、ゼミ制度拡充等教育改革に取り組んだ。また、沖縄大学は早くから就職指導の強化に取り組み、その実績及び社会教育活動等を通して注目を集めるようにまでなった。1997年には、少子化に備えて学部学科の大幅な改組転換をスタートさせたが、新たな問題を抱えていることなどが紹介された。

法経学部は、従来、法学科と経済学科の2学科から成っていたが、これを法経学部法経学科の1学科（一部100名、二部100名の計200名）に改めた。一方、併設されていた短大部英語科を廃止して、新たに人文学部を設置し、国際コミュニケーション学科（一部定員150名、二部定員100名の計250名）と福祉文化学科（一部定員80名、二部定員50名の計130名）の2学科を新設した。18歳人口の減少と、入試の多様化等による影響からか、新入生の学力低下は否めず、基礎学力調査（国語、英語、数学）に基づき、特別講義（教養英語、教養数学）等の補習教育を実施したり、問題発見演習（4単位）、日本語のシステム（2単位）、コンピュータ入門（2単位）などを新入生必修科目として指定するなどの教育改善に取り組んでいる。しかしながら、このような取り組みにもかかわらず、少なからぬ退学者・除籍者数（合計100名以上）により定員割れが懸念されている。その背景には、最近の不況による経済的な問題（アルバイトのし過ぎ）の他に、教育サービスに起因する点（学部の全教員が手分けしての、全学生に対する科目登録等の履修指導の徹底）などが指摘された。

語彙や抽象的思考などにおいて、あまりに多様な学生に対する「教育方法」の改善・工夫（FD）の必要性と緊急性についての指摘。教育の効率性を重視した「能力別」クラス編成による功罪。一方、学生は自分にとって興味深い内容の講義には、集中することができるなどの点につい

ても指摘された。だから、学生の感性に訴えて、できるだけ「ほめる」ことが重要で、「学びの意義」と動機づけ（自己発見）をいかにして提示できるか否かについての興味深い事例等についての報告があった。

3) 大城宜武先生（沖縄キリスト教短期大学教授）「短期大学における表現技法とコンピュータリタラシー」

沖縄キリスト教短期大学は英語科（入学定員 250 名）と保育科（同 100 名）の 2 学科からなる短期大学である。大学生評として「読まない・書けない・考えない」がいわれるようになったのは 1980 年代以降のことである。この風潮を打破すべく 1982 年から新入生必修科目として「表現技法」を立ち上げて、「読める・書ける・考える」の技能の涵養に努めている。また、最近のインターネットをはじめとした情報通信技術の急速な進歩は、情報格差現象（デジタル・デバイド）を引き起こす懸念がある。まして、「機械に弱い」女性がほとんどを占める本短大では、懸念どころか、実態そのものである。こういったことから、家電なみにコンピュータが使いこなせるようにと、1997 年からは、新入生必修科目として「コンピュータリタラシー」を立ち上げた。大学入門教育科目の一つとして注目されている、これら必修科目の授業内容と、その授業効果・達成度に関する概要が報告された。

「表現技法」の授業内容は、文藝春秋の「日本の論点」シリーズのような作品をテキストとして選定し、精読させ（批判的に読む）、その要約（400 字程度）及び批評的視点から 1600 字程度で評論することを課している。その外に、ブックリポートとしては、テキストとして「新書」相当のものを 40 タイトルほどを用意し、その中から 1 冊を選ばせ、読書案内（紹介）と書評（評価）を 1200 字程度でまとめさせている。もう一方の「コンピュータリタラシー」は、運指技能（もぐらたたき）文書作成（MS-Word）、表計算（MS-Excel）、メール（EudoraPro）、インターネット（Internet-Explorer）、ホームページ（IBM ホームページビルダー）及び描画（キドピックススタジオ）ソフト等のさわりについて学ぶ。これら科目の 1 クラス当たりの定員は、30 名程度で、1 コマ 90 分で 15 回開講している。学生による授業評価によると、要約や評論などは、ほとんどの学生にとり経験が無く、短大で初めて学ぶことなので戸惑いがある。学生にとっては、ブックリポートでも、今まで自分がしてきた読書量の少なさを痛感させられるとの意見が多い。英語科学生の場合、英語を勉強するために入学したのに、なぜ日本語なのか？と憤慨する声も少なからずある。しかし、そのうちに日本語で出来ないことが、英語で出来るはずがないことに気づくようである。コンピュータリタラシーについては、意外にも運指練習（タイピング）に人気があり、ワンストローク 0.3 秒台を目指して頑張っている。メールやインターネット関連の技能については、ほっておいても上達しているようである。一方、プログラミング力が要求される表計算や、「情報量」や「情報理論」などの座学的なテーマに関しては食いつきが弱いことなどが報告された。

フロアからの意見及び全体討論について

大里栄子先生が発表された「プレゼминаールの意義と問題点」に対して、大学教育で、そこまでやらなければならないのかと、思っている人がいる反面、平成 15 年度から改定される指導要領の元、いわゆる「ゆとり教育」により指導・教育された学生のことを考えると、現実の問題として「読む」「書く」「話す」にはじまり、「箸の上げ下げ」に至る、学習指導から日常の生活指導全般までを担わされることに対し、危惧する意見が出された。少子化に伴う 18 歳人口の減少により、

入学後の学習指導と生活指導に関しては、現実問題として、すでに大学間でかなりの温度差を生じつつある。これらのテーマに関しては、今から真剣に取り組まなければならないことで意見が一致した。

今江正知先生が発表された「理系の作文教育」について、フロアから次のような意見が出された。作文能力の習得は、日々の日記をつけるような、単純な同じことの繰り返しによる、根気を必要とする反復練習と、地道な努力の積み重ねにより可能である。作文に代表されるような時間のかかる割には即効性のない演習・実習などは、現在のゆとり教育において削減される傾向にある。こういった傾向は、作文教育に限ったことではない。同じようなことは、数学における計算力においても、その傾向は顕著に現れている。計算能力は、単純なことのくりかえしによる反復演習によってのみ獲得することができる。理科離れ、もの作りが軽視される風潮にあって、それを食い止めるには、最初はきつくて単純なことの繰り返しによる演習・実習・実験が何よりも大切である。そして、そういった演習・実習によって出来上がった作品（作文であり、計算問題などの課題）については、ほめてやるのが大切である。ほめてもらうことにより、達成感と次の作品・課題・宿題への意欲が湧くものである。「ほめる」ことは大学教育においても重要である。こういった根気と苦勞の伴う演習・実習に対して、ほめることは特に有効である。

森川恭剛先生が発表された「基礎演習の試み-専門教育から教養教育への架橋-」についてのフロアからの意見・コメントは以下のとおりである。「基礎ゼミ」とか「基礎演習」と呼ばれている科目は、普通、専門科目または専門教育への導入教育または補習授業の一環として行われている場合が多いと思うが……。琉大のケースのように専門教育の立場から、学問の基礎としての教養教育の重要性を考えてみるのも良いかもしれない。しかし、「読めない」「書けない」「話せない」という学生に対して、大学生としての自覚を持たせ、生活指導から始めなければならないような大学・短大もあるという現実を知っていただきたいとの意見もあった。

門久義先生が発表された「社会参加意識の啓発に関わる教育プログラムの試み」に関してフロアからの意見コメントはつぎのとおりである。大学を卒業しても、定職に就かず、フリーターと呼ばれる身分で、日々の生活費を稼ぎ学生生活を延長している若者が増えて社会問題にもなった。偏差値による入学試験の洗礼を受けて、大学に入学した若者の多くは、将来就くであろう職業人としての確固たる自覚の元に、大学・学部・学科を選択して来たわけではない。そんな彼らに対して、インターンシップとか現業実習と呼ばれる科目が提供されるようになった。こういった科目の多くは、専門教育としての専門分野に対する動機付けを目的としていて、それなりの評価はできる。しかしながら、短期間の現業実習やインターンシップからは、職業人としての生き様や、生き甲斐とか将来に対する夢といった内容については、ほとんど学ぶことはできない。そこにあるのは、ただ単に職種に対する仕事の内容について垣間見ることができに過ぎない。

大学教育の中で、特に、工学教育における一本の柱として、起業家的センスを備え持った高度技術者の育成が議論されている現状にあっては、職業意識を高揚するような、この種の教育プログラムは重要であるということで意見が一致した。

土田武信先生が発表された「大学入門教育について～沖縄大学（法経学部）の場合」に関してのフロアからのコメント・意見については、つぎのとおりである。少子化に伴う18歳人口の減少による影響で、すでに短大及び一部の私立大学においては定員割れが生じている。このような状況では、事実上、入試による入学者の選抜はもはや行えない。そして、一度入学させた学生を、

アルバイト等のし過ぎによる出席日数不足とか、学業成績不良等の理由により除籍としたり、退学させることは、即、定員割れにつながり、大学・学部の存続基盤そのものを危うくさせる。もうすでに、2011年から始まると予想されている全員入学に向けての、生き残りを賭けた学生の争奪戦が開始されている。学力低下を補うための各種補習授業（リメディアル教育）から、学生の科目登録のチェック等の履修指導に至る、きめ細かい教育サービスが求められている。そのためには、全教員が手分けして事にあたらなければならない日も近い。

土田先生が指摘した、あまりに教育の効率性を重視した「能力別クラス編成」は、場合によっては弊害になることがある。気分も新に大学に入学しても、能力編成で最下位にランクされるクラスに入れられたのでは、気分も萎縮してやる気を無くさせる。同じレベルの学生を集めたのでは、クラス全体を引っ張り上げる牽引者となる人材がいなくなるなどの点がフロアからも指摘され、賛同を得た。自分にとって興味のある内容については、ほとんどの学生が講義に集中することができる。だから、学生の感性に訴えて、「学びの意義」と動機づけを与えて、後はいかにして学生を「ほめ」てやり、いかにして「やる気」を出させるかが重要であるとの意見がだされた。学生を「やる気」にさせるための教育方法の改善・工夫（FD）の必要性と緊急性があるということ意見が一致した。

大城宜武先生が発表した「短期大学における表現技法とコンピュータリタラシー」に関するフロアからの意見とコメントは、つぎのとおりである。

学生は自分の知りたい情報とか、自分の興味のある知識等に関しては、それらがインターネット上のどこにあるのか定かでもなくとも探す努力をする。授業であれこれと教えなくとも、自ら進んで本を読んで勉強したり、または、友達からその検索方法を聞き出す等の努力をして、なんなく手に入れることができる。一方、さしあたり直接自分の欲求を満たすこととあまり関係のない、抽象的なプログラミング技術とか情報理論の習得には興味を示さない。

意外なことに、運指練習（タイピング）に人気があるとのことである。普通に考えて、学生にとってタイピング練習が面白くて、楽しいものとは思えない。「もぐらたたき」がはじき出すスコアは、プログラムが指示するキーを入力した本人のスピード（タイム）であり、時間当たりのキー入力回数と、その正確さである。はじき出されるスコアは、本人の実力を正確に示し、初心者にとっては大変厳しいものである。しかしながら、たたき出したスコアによって熟練者やクラスメートと比較されることはない。出力されるスコアは、今日の自分の成績に対する絶対評価である。だからこそ、自分なりの目標を設定し、明日向かって自分の能力を信じて、あまり面白くない練習に励むことが出来るのかもしれない。このあたりに、動機付けと評価に対するヒントが隠されているような気がする。

おわりに

最後に、体調を崩して入院中にもかかわらず、当日は病院を抜け出して来て本研究発表をしていただいた沖縄大学の土田先生をはじめ、つたない進行役にもかかわらず、2日間にわたり本研究部会に参加して、熱心な討論に加わっていただいた皆様方に、心からお礼申し上げます。なお、発表者及びフロアからの発言・コメント等で、われわれの不手際により欠落しているものが多々あると思います。また、貴重なご意見やコメントの多くが、紙面等の都合等により、われわれの独断で割愛したことを明記してお詫び申し上げます。

琉大特色科目－大学の理念は共通教育で－

琉球大学 仲地 博

1 はじめに

琉球大学では、平成 13 年度に共通教育と大学教育センターについて外部評価を実施している（詳細は『琉球大学・大学教育センター報第5号「特集外部評価」』を参照いただきたい）。外部評価は、公開シンポジウムという形をとって行われた。外部評価委員である押川元重九州大学教授は、次のように述べている。

「私はこの琉球大学の共通教育について最初から注目しておりますのは、「琉大特色科目」です。よその大学からみますと、あっと思うのはこれです。ほかでは、こんな科目を設けてらっしゃる大学はないんじゃないかと思います。しかも琉球大学の教育の理念・目標のなかにある「地域に根ざした教育をやる」というのがありますが、それを具体化されているという面でも非常に立派だと思います」。

琉大特色科目の評判がいい。押川教授の他にもたとえば、①平成 10 年 12 月に行われた教養教育についての文部省の視学委員の現地視察において、「沖縄伝統を生かした琉球科目（原文のまま）の開設や情報処理教育の重視については評価できる」とされた。ちなみにこの際の委員の所見は 4 点あるが、他の 3 点は要検討事項の指摘である。②平成 11 年 11 月に行われた工学視学委員も、日本語表現法と並んで琉大特色科目を評価した（工学部長談）。③平成 12 年 3 月の大学基準協会の加盟判定審査結果は、長所の指摘として、「学部の教育課程では…地域性を考慮した科目が多数開設されており、地域性と国際性という目標に即して努力がなされていることは、評価できる」としている。もっともこれは共通教育を名指してはいない。④琉大特色科目を聞きつけてヒヤリングに来られた某大学副学長も、「総合科目の工夫で一步先んじていると思っておりましたが、琉大さんが先をいってますね」という感想であった。

琉大特色科目は、文字通り琉大のカリキュラムの特色となっているが、そのねらいとするところはおそらくほとんど知られていないように思う。本報告の目的の第一は、琉大特色科目の成り立ちのころを振り返る中で琉大特色科目がどういう理念の下にカリキュラム化されたかを確認するとともに、学外の方に紹介することにある。

目的の第二は、現段階における点検である。先に紹介した押川教授の発言は実は続きがある。「ちょっと残念なのは、自己点検評価報告書そのもののなかに、この「琉大特色科目」が現状でどういう形で実施され、そのなかにはどううまくいっているのか、改善すべき点があるのかということが、私としては読み取れなかったわけです。そういうことが一番問題になると思います。外からみると、まず目立ち、かつ一番、琉球大学の共通教育にとって売り物になるもの、そこについての売りが足りないと思います。完全に理想的にはうまくいっていない部分もあると思うんですけど、一番特色を持って取組んでらっしゃるものがあるので、是非それが外からもよく見れる形にすることに今後努力されたほうがいいんじゃないかと思います」と。すなわち、本報告は、

旧教養部の一員として琉大特色科目というカリキュラムの創設にかかわり、また、外部評価の際の大学教育センター長であったものとして、押川教授の指摘に対して自己点検をしておきたい、というのが目的の二点目である（あくまで個人的な点検であり、いずれ大学評価センターによる組織的な自己評価が期待される）。

2 現在の琉大特色科目

現行の共通教育の授業科目区分は、表1の通りであり、琉大特色科目を含む総合領域の科目は、表2の通りである。

表1 共通教育授業科目区分

教養領域	人文系科目、社会系科目、自然系科目、健康運動系科目
総合領域	総合科目、琉大特色科目
基幹領域	情報関係科目、外国語科目

表2 総合領域（総合科目十琉大特色科目）

領域	科目番号	科目	授業科目	単位数	期間	週時間	備考	領域	科目番号	科目	授業科目	単位数	期間	週時間	備考
総合領域	総01	脳	脳の発達と人間	2	半	2		総合領域	高総01	現代社会の課題	現代社会の課題	2	半	2	
	"02	認識	認識の仕組み	2	"	2			"02	科学者とは何か	科学者とは何か	2	"	2	
	"03	環太平洋	環太平洋地域の文化	2	"	2			"03	科学者の責任を考える	科学者の責任を考える	2	通	2	
	"04	ヨーロッパ	ヨーロッパの文化と社会	2	"	2			"05	倫理総合討論	倫理総合討論	2	半	2	
	"05	ヨーロッパ	ヨーロッパの歴史と伝統	2	"	2			"06	現代アメリカ論	現代アメリカ論	2	"	2	
	"06	アメリカ	アメリカの文化と社会	2	"	2			"07	女性学	女性学	2	"	2	
	"08	現代青年	現代青年の心とその病理	2	"	2			"07	ゼロ・エミッション	ゼロ・エミッション	2	"	2	
	"09	科学	科学と社会	2	"	2				-地球環境時代の産業と社会-	-地球環境時代の産業と社会-	2	"	3	
	"10	住まい	住まいの科学	2	"	2			琉01	平和論	平和論	2	半	2	
	"11	環境	環境の科学	2	"	2			"02	核の科学	核の科学	2	"	2	
	"12	環境	環境の保全	2	"	2			"03	女性と社会	女性と社会	2	"	2	
	"13	国際比較	国際比較都市論	2	"	2			"04	適応の心理	適応の心理	2	"	2	
	"14	公害	公害問題	2	"	2			"05	沖縄の基地と戦跡Ⅰ	沖縄の基地と戦跡Ⅰ	2	"	2	
	"15	熱帯	熱帯の科学	2	"	2			"06	Ⅱ	Ⅱ	2	"	2	集中講義
	"16	地球環境	地球環境と人間	2	"	2			"11	ウチナーグチ入門（初級）	ウチナーグチ入門（初級）	2	"	2	
	"17	情報科学	情報科学概論	2	"	2			"12	（中級）	（中級）	2	"	2	
	"18	情報分析	情報分析入門	2	"	2			"13	近代沖縄の社会と表現	近代沖縄の社会と表現	2	"	2	
	"19	UNIX	UNIX入門	2	"	2			"14	琉球の文学	琉球の文学	2	"	2	
	"20	ヒト	ヒトの科学と人間の医学	2	"	2			"15	沖縄の美術・工芸	沖縄の美術・工芸	2	"	2	
	"21	動物実験	動物実験の基礎	2	"	2			"16	沖縄研究入門	沖縄研究入門	2	"	2	
	"22	遺伝子	遺伝子の話	2	"	2			"17	現代教育と沖縄	現代教育と沖縄	2	"	2	
	"23	大学	大学とは何か－大学の自治と大学人の責任を考える	2	"	2			"18	地域の科学	地域の科学	2	"	2	
	"24	食物	食物と人間	2	"	2			"19	地域文化論	地域文化論	2	"	2	
"25	先端情報	先端情報工学概論	2	"	2		"20	古琉球の文字と交易	古琉球の文字と交易	2	"	2			
"26	森	森の文化史	2	"	2		"21	琉球－台風と風土	琉球－台風と風土	2	"	2			
"27	死	死と哲学の知	2	"	2		"22	琉球の自然	琉球の自然	2	"	2			
"28	科学	科学と疑似科学	2	"	2		"23	琉球の自然保護	琉球の自然保護	2	"	2			
"29	環境	環境保全型農業	2	"	2		"24	沖縄のサンゴ礁	沖縄のサンゴ礁	2	"	2			
"30	自由	自由と民主主義の研究	2	"	2		"25	琉球弧の自然誌	琉球弧の自然誌	2	"	2			
"31	キャリア	キャリア概論	2	"	2		"31	異文化間コミュニケーション	異文化間コミュニケーション	2	"	2			
"32	高齢	高齢社会を生きる	2	"	2		"32	ことばと文化	ことばと文化	2	"	2			
"81	大学	大学間共同授業	2	"	2	集中講義	"33	現代の国際関係	現代の国際関係	2	"	2			
"91	総合	総合特別講義Ⅰ	2	"	2	"	"41	アジアと沖縄	アジアと沖縄	2	"	2			
"92	"	Ⅱ	2	"	2	"	"42	移民論	移民論	2	"	2			
"93	"	Ⅲ	2	"	2	"	"91	琉大特色特別講義Ⅰ	琉大特色特別講義Ⅰ	2	"	2	集中講義		
							"92	Ⅱ	Ⅱ	2	"	2	"		
							"93	Ⅲ	Ⅲ	2	"	2	"		

3 琉大特色科目の経緯

琉大特色科目の議論の開始は、1992年に旧教養部内におかれた将来計画委員会においてであった。1991年（平成3年）の設置基準の大綱化を受け、琉大においてもあるべき教養教育の模索が始まったのである。93年（平成5年）2月の教養部将来計画委員会の報告書「教養教育の理念と内容—大学教育における教養教育の位置づけ」（以下では「教養部報告書」）は現在から見てもかなり興味深い議論が行われているが、詳細に紹介する余裕はない。ここでは、教養部報告書に添付された教養教育の体系表（表3）を掲げるにとどめる。

さて琉大特色科目の源流は、この表3中の琉大教養科目である。教養部報告書は、教養をその性質で分類し、「大学卒として持つべき教養」と「専門家として持つべき教養」に分けている。大学卒として持つべき教養とは、人間性豊かな知識人を養成する機関たる大学（教育の）根幹をなす部分であるとし、さらにそれを二つに分けている。すなわち①大学が大学として普遍的に有する教育理念と②個別大学が建学の精神等により持つ教育理念を区別したのである。

①については、「大学の普遍的理念に基づく教養教育である。国内外を含めた歴史と文化、自然と環境に対する理解等がこれにあたろう」として、この分野に属する科目を普遍教養科目と呼ぶことを提唱している。

②を、「琉大独自の理念に基づく教養科目」とする。これが琉大特色科目の原点となった。教養部報告書がたたき台となり、全学委員会である「教育改善特別委員会」において新カリキュラムが作成されたのである。

以下に、琉大特色科目のコンセプトを紹介する（95年（平成7年）9月教育改善等特別委員会でオーソライズされたものに若干の加筆修正を加えてある）。

4 琉大特色科目設置の理由

すべての教育機関は、それぞれの理念のもとに教育を行う。琉球大学においても、またそうである。それは、教養と専門を問わない。問題は、理念を単なるお題目とせず、教育の中で息づかせることである。琉球大学の理念を教育の中でどのように具体化するかは、学部の教育においても努力が払われるであろうが、教養教育においてこそその可能性は大きいといえる。すなわち、大学の個性化は、教養教育でこそ可能である、という視点が重要である。「専門教育は、ある特定の学問分野を対象とする限り、どこの学部においても画一的に実施されなければならない。」「むしろ大学の個性化は、一般教育においてこそ発揮できるし、そうあらねばならない」（国立大学協会『教養課程の改革』）という視点である。琉球大学の理念を、教育の面で具体化する科目が教養教育において提供されるべきである。それによって、琉球大学の理念は理念どまりにならず、現実的な教育内容を持ったものとなろう。琉球大学の理念は、琉球大学の個性を表現するものであり、これを教育面で実質化する科目が琉大特色科目である。

琉大特色科目は、琉球大学の理念である

- ① 真（真理の探求）
- ② 公（地域社会、ひいては国際社会への貢献）
- ③ 和（平和を目指す人間関係の確立、人類と自然界との調和共存）

を具体化する教養科目（群）であり、次の4つの柱から成り立っている。

- ① 「自由と平等」「寛容と平和」の教育

- ② 地域に根差した教育
- ③ 国際化に対応する教育
- ④ 「熱帯・亜熱帯、海洋、島嶼」を考える教育

表3 教養科目の分類と展開

分類の基準	分類		授業科目の例	配当年次	教育内容との関係	最低履修単位
専門教育との有機的関連	専門を支える教養教育	基幹科目	外国語、情報処理、国語表現法	1, 2	①③④	外国語12単位を含む14単位以上
		先修科目 転換科目	教養ゼミ	1	④	ゼミ2単位を含む2単位以上
	専門を超えた教養教育 (学際科目)		琉球の自然保護、科学と社会、公害問題、核の科学、琉球の風土、住まいの科学、環境の科学、国際比較都市論、適応の心理、小児の体と心、脳の発達と人間(注1)	3, 4	⑤⑥	4単位以上
教養の性質による分類	大卒として持つべき教養	大学の普遍的理念に基づく教養 (普遍教養科目)	東洋思想、言葉の科学、美術、宗教と社会、マスコミュニケーション、消費と流通管理の科学と情報、地球の科学、生物の生活、環境デザイン論、保健体育(注2)	1~4	②⑤⑥	保健体育3単位を含む12単位以上
		琉大の独自の理念に基づく教養 (琉大教養科目)	別表参照	1~4	①③⑤⑥	4単位以上
	専門家として持つべき教養 (専門教養科目)		教師の憲法学、医師の生命哲学 看護の法律学	4(6)	①⑤	

総計40単位以上

注1のグループは総合科目、注2は人文、社会、自然の各科目である。
注1のグループと注2のグループの違いは、学際的か、個別の学問分野の中での特定テーマか、という点にある。

5 琉大特色科目の内容

①「自由と平等」「寛容と平和」の教育

開学記念式典において志喜屋孝信初代学長は次のように挨拶している。「琉大の開学式に際してわれわれ職員、学生は、ここに本大学設立の意義を深く認識するとともに、今日のよき日がリンカーン大統領の誕生の日であることに思いを致し、奴隷解放の大事業を以てアメリカ民主主義の体現者と仰がれる人格徳望を日夜敬慕し、世界全人類に通じる正義と人道への道を直進したい」。

リンカーンが奴隷解放の父と呼ばれ、自由と平等のために戦ったのはよく知られている。また、1864年の就任演説において彼は、「南北戦争は、奴隷制度を持っていたアメリカに対して神が与えた試練であり、勝者も敗者も共にこの試練を謙虚に受け止め、憎しみを捨ててすべての人に対し寛大な心を持って平和のために努力しよう。」と述べている。戦争で多くの人々が血を流し、命を失ったこの沖縄の地に戦後復興の担い手となる人材育成のために琉球大学を創設するに当たって、関係者はリンカーンのこの寛容と平和へのアピールを鮮やかに思い起こしたに違いない。

1952年の布令66号琉球教育法が、「本学は、琉球の人々に対し…自由を…尊重せしめるを目的とする」と謳ったのは、まさにこのような理念を背景にしたと推察されよう。未来へ向かい、「自由と平等」「寛容と平和」という崇高な建学初期の理念を伝える教育を、教養教育として行う。

② 地域に根差した教育

戦塵まだ収まらない1947年、各高等学校の生徒たちは、全琉連合生徒自治会を結成し、大学設立の運動を開始した。彼等が、1948年大学設立の嘆願書を軍民両政府に提出、同時に大学設立資金にと8万5575円(B円一米軍票)を寄付した事実をわれわれは感動とともに想起する。1950年創立時の大学便覧は巻頭言の冒頭で、「本大学は、日本のものでも米国のものでない。これはその創立者たちが、勉学せんとする者の要望を満たし、かつ琉球諸島の人々の役に立つ学府に成長するようにと念じて創設されたものである」と述べている。すなわち、「地域の役に立つ」、これは建学の理念と言ってよい。そして、琉球政府が乏しい財政の中で琉球大学を維持発展させてきたことも忘れてはならない。琉球大学は、今国立大学であるが、その育ちにおいて県民の手作りの大学であった。その歴史を路まえ、地域を大事にし、地域を取り上げ、地域に学ぶ教育、地域に貢献する教育を、教養教育として行う。

③ 国際化に対応する教育

首里城内にあった「万国津梁の鐘」銘文が、「琉球国は、…舟しゅうを持って万国の津梁(かけはし)となし、異産至宝は十万利に充満せり」と謳ったように沖縄は、かつては東アジア、東南アジアを結ぶ中継貿易の一大拠点をなしていた。また、沖縄は有数の移民県であり、沖縄県系人は、今なお母県との強い精神的絆を保ち、海外との交流は盛んである。第2次大戦後は、27年間続いた米国統治という特殊な条件の下ではあったが、多くの県民はアメリカ人、アメリカ文化と接触した。

琉球大学自体も琉球列島米国軍政府立として発足した。設立間もない1951年から本土復帰の足音が聞こえはじめた1968年まで、ミシガン州立大学からの教授団を受け入れるなど、米国との教育・学術交流が本学の発展、充実に大きく貢献したことは否めない。本学のスタッフの多くも米国留学中、米国人教授・学生のみでなく世界各国から来ていた留学生との交流により、豊かな国

際的経験を積んできた。

今、ボーダレス時代、国際化時代と言われる中で、人・物・情報・技術のグローバルな交流と各国間の相互依存の度合いが、かつてないほど加速度的に増大している。上記のような歴史を生かして、国際化を主体的に推進するには、外国の言語の習得や文化の理解と共に、地球市民としての自覚と責任を持ち、共生の思想の下に、国際化社会へ貢献できる人材育成が重要である。琉球大学は国際的センス豊かな教養教育を行う。

④「熱帯・亜熱帯、海洋、島嶼」を考える教育

日本の中で、琉球大学が立地する沖縄の地理的特色は、亜熱帯、海洋、島嶼のいう諸点にある。住民の生活もまたこれらによって規定されている。琉球大学の研究も、「熱帯・亜熱帯、海洋、島嶼」に関する研究を指向してきた。ハワイ大学が、東西の接点を特色としてアピールしたように、琉球大学は南北センター、地域型研究機関などの構想を議論した歴史をもつ。その一部は、全国共同利用施設熱帯生物圏研究センター、地域共同研究センターに結実している

琉球大学は「熱帯・亜熱帯、海洋、島嶼」に立脚した研究に適しており、琉球大学の特色が色濃く現れるところである。これらの研究の成果を教養教育に幅広く反映させ、「熱帯・亜熱帯、海洋、島嶼」に関する理解を深めることは琉球大学の使命である。

表2の琉大特色科目の科目番号をご覧いただきたい。00番代は、自由と平等・寛容と平和に関する科目であり、10番代と20番代は、地域に関する科目、30番代は国際化に関する科目、40番代は、熱帯・亜熱帯、海洋、島嶼に関する科目である。

6 琉大特色科目の現状と課題

まず現状（平成13年度）について述べる。琉大特色科目は、表2に見るとおり科目数29である。開講クラス数は、前・後期併せて37クラス、受講者数2,722人である。人文系、社会系、自然系、一般総合と比較すると、人文・社会系はクラス数が多いので受講学生も多いが、一クラスの平均受講学生はどの系列も平均70人代で偏りはない。特に琉球大学特色科目が学生の人気があるとか逆に人気がないということはないようである。しかし、登録者が2,722人ということは、一人の学生の1.5科目が受講していることになる（入学定員1,545人）。単年度でこれだけなので、卒業までに一人の学生が平均して2ないし3の琉大特色科目を履修していることなろう（この点について、分科会の席上で押川教授から、これだけの学生が受講しているならカリキュラムの目的を達しているという趣旨の評価をいただいた）。

卒業の要件として総合科目・琉大特色科目などの総合領域から履修を義務づけるのが教育学部、理学部（学科により異なる）、工学部などであり、法文学部・農学部は義務付けない。琉大特色科目を特に指定して義務付ける学科はない。義務付けるのが望ましいかどうかは他に考慮すべきこともあり、簡単ではないが、義務付けなくてもこれだけの受講生がいればよしとすべきかと思う。

私が検討を要すると思っている点を述べる。まず、意義が学生教官に必ずしも周知されていないことである。単に地域関係科目と思われていたり、はなはだしい場合は、カルチャア的科目と見なされているようである。琉球大学の理念を教育の面で具体化する科目群としての認知を広げ

る必要がある。

第二に、開講されない科目（現代教育と沖縄、アジアと沖縄、移民論等）がある。琉球大学特色科目のみの問題ではないが、琉球大学の共通科目の名称は学問分野ではなく、テーマを掲げた科目名となっているので誰でも持てるわけではない。例えば、「法学」という科目ならば、担当可能な専門家は 20 人いるが、「環境と法」となると誰でも持てるというわけではない。琉大特色科目は特にその傾向が強い。カリキュラムは不断の見直しが必要だが、琉球大学特色科目は特にそのことがいえる。新設の努力、開講の維持、それができなくなったときの廃講の措置などである。

第三に、琉大特色科目のコンセプトに合致するが、他の分野に分類された科目がある。例えば、「熱帯の科学」、「亜熱帯—西表の自然」、「空手」、「琉舞」等である。空手、琉舞は健康運動実技であるが、人気科目のようで前期後期併せてそれぞれ 4 クラス開講されている。これらの科目が琉大特色科目に分類されなかった理由は明らかでないが、たぶん新カリキュラムの構想時、あるいは新科目として追加されるときに、従来の科目区分や、担当者の専門分野に引きずられた結果だと推察される。この科目は琉大特色科目ではない、という積極的位置づけをしたとは聞いたことがないからである。その整理が課題である。

琉球大学における平和教育「核の科学」の約 20 年間の実践について

琉球大学 堺 英二郎

1. はじめに

琉球大学では、1984 年度から総合科目（現在はカリキュラムの再編により琉大特色科目に分類されている）「核の科学」として平和教育を行ってきた。今年で 19 年目に当たる。この「核の科学」の約 20 年間の実践について以下に報告する。

2. 「核の科学」の授業の目標

まず「核の科学」の授業の目標を、教科書「核と平和の科学」の序文から引用すると、

1. 現在が核時代であることを認識し、「核」についての基礎的知識を修得するとともに、「核」の開発がもたらす原子力エネルギー問題、核兵器体系、核戦略の実情と系譜、核軍拡競争の原因と結果、核実験や核戦争による被害などの諸問題を科学的に解明する。
2. 人類の英知としての非核・平和・核軍縮などの基本概念を修得し、とくに、人類の平和と安全が核軍備によって守られるのではなく、核軍縮による諸国民相互の信頼と友好関係および新しい型の国際秩序の形成によって樹立されるという理念を修得するとともに、各学習者が、核問題の解決をめざして何をなすべきなのか、について考察を深める
3. 「戦争」に対置される「平和」の課題のみならず、人権・開発・南北問題など、いわゆる構造的暴力をもたらすとされる諸問題、地球環境問題等も広義の「平和」の課題として取り入れる。
4. 20 世紀の戦争と核の時代を省みて、その負の遺産の教訓と人類の平和への努力から学びとり、21 世紀の平和をいかに築くべきかを考え、論じ合う。

である。

3. 「核の科学」開設の経緯

1970 年代の終わり頃からヨーロッパへの中距離核兵器の配備を巡り世界的に核兵器廃絶を求める運動がわき起こり、国連でも核軍縮を議題に 1978 年に SSD I（第 1 回国連軍縮特別総会）、1982 年に SSD II が開催された。そのような中で、広大な米軍基地を抱える沖縄に立地する琉球大学に核問題の専門家がいないのは問題ではないかと考え始めた理学部教官の有志が、1982 年頃から核問題の勉強会を始め、それが 1 年以上継続した。内容は核兵器の原理、核兵器体系、核戦略体制など、主に技術的な側面に重点を置いた勉強会であった。

その成果がある程度蓄積したときに、せっかく勉強したのだからその成果を是非学生へも広めようということになり、1984 年 4 月から、琉球大学・一般教育科目の総合科目として、「核の科学」を開設することになった。授業を提供するからには、単に核兵器や核戦略体制の技術的な内容だけではなく、社会科学、教育学、医学も含め、学内に広く人材を求め、総合的な平和教育を

目指すこととなった。その結果、担当者の専門は、理学、工学、医学、法学、行政学、経済学、教育学と広範囲にわたり、核問題を中心とした総合的な平和教育になっている。

「核の科学」の担当教官は当初の理学部中心のメンバーから広い専門領域の教官が参加してきたので、これを生かして担当者自身の広い意味での平和問題に対する見識を深め授業に反映させるために、琉球大学核の科学教材研究会を組織し、月2回程度の教材研究を継続的に開催した。

4. 授業内容と方法

(1) 授業内容

「核の科学」の担当者の専門は、理学、工学、医学、法学、行政学、経済学、教育学と広範囲にわたっており、2002年度の講義内容は、「米世界戦略と NATO・日米安保」、「核軍事同盟としての日米安保」、「新たな日米軍事同盟体制のもとでの在日米軍・沖縄基地」、「憲法と核」、「平和の創造」、「広島・長崎の被爆者と原水禁運動」、「戦争・原爆の追体験」、「沖縄から平和文化創造～南と北の子どもたち」、「沖縄から見る国と平和」、「核の原理」、「核兵器体系」、「核爆発の影響」、「原子力発電と核融合」、「世界のエネルギー政策と自然エネルギーの開発」、「劣化ウラン弾」であり、核問題を中心とした総合的な平和教育になっている。

授業内容を概観してもらうために、1984年度と2002年度の授業計画を掲載する。授業計画は、学生の受講の参考になるように、学期はじめの登録時に登録した全学生に配付している資料である。

開設当初は農・工学部を除く全学部の教官が担当していたが、現在では学内全学部の教官および学外非常勤講師で授業を担当している。これは、定年や異動により担当者がいなくなった場合にも全学部から担当教官が出るように意識的に努力したためである。また、学外非常勤講師は当初は依頼したくても実績のない授業には非常勤講師を雇ってもらえなかったのだが、毎年100名を超える授業者がいることからその実績が認められ、1991年度から学外非常勤講師を認めてもらえるようになった。

当初は、夏休みに「戦跡・基地見学」「原爆被爆地見学」を企画したが、担当者の負担も大きく参加者もさほどではなかったので、初年度のみの実施となった。また、学期末には「パネルディスカッション」に1回の授業をあて、(出席可能な)全担当教官の出席の下で自由討議を行った。当初は担当教官の意気込みも高く学生の関心もありそれなりの成果を上げたが、次第に尻すぼみになり1986年度を最後に取りやめとなった。

また、核の科学教材研究会としてビデオ教材の収集にも努力し、学内科研費でビデオプロジェクターと教室設置の大型スクリーンを購入し、積極的にビデオ教材を活用している。

(2) 教科書

教科書としては1984年に開催されたシンポジウム「核と沖縄」の報告集を流用していたが、残部が無くなったのを機会に、教材研究会のもとに内容を手直しして1986年4月「核と沖縄」改訂増補版を500部印刷し、これを教科書とした。

1990年4月には、内容を全面的に改訂して、教科書として「核の科学」を500部出版した。その後も残部が無くなるごとに内容を改訂しタイトルも変えて、1994年4月「核の科学と平和」(1000部)、今年5月に「平和と核の科学」(1000部)を出版した。

(3) 成績評価の方法

「核の科学」は担当者がほとんど毎回交代するので、学期末のレポートや試験で成績を評価することが困難なので、各担当者が講義の最後にミニテストを行うか、レポートを課して、10点満点で採点し、それを集計して成績評価を行っている。

(4) プレ・ポストテストの実施

この授業では、受講した学生の核や平和に関する意識や知識がどのように変化したかを系統的に把握するために、全く同じ設問で授業の最初（プレテスト）と最後（ポストテスト）にテストを行っている。

プレポストテストの設問は24項目にわたるので、ここでは、主なものだけを示すと、①核戦争勃発の危険性、②核抑止論、③核兵器廃絶実現の方法、④非核三原則などである。

このテストでは、受講学生1人1人について受講前と受講後とでどのように変化したかを追跡できるように、個人を特定できるように誕生日を利用したコードを記入してもらっている。ただし、氏名を書かせると正直に回答しないおそれがあるので、氏名等を記入させることは避けている。

5. 教材研究会および世話人の活動

「核の科学」開設当初は、担当者自身が核問題の学習が不十分であることもあり、教材研究会を組織して毎週か隔週に1回のペースで教材研究を行った。研究会の内容は、自分が「核の科学」の授業で担当するテーマや得意な分野について相互にレクチャーし合うものであった。この活動により、授業担当者の核問題・平和教育に関する全般的な理解が深まり、「核の科学」をどのような目的で、どんな内容の授業を提供するのかについて、教材研究会の会員（すなわち「核の科学」の担当者）全員が統一した認識を持つことができるようになった。また、お互いの授業を参観することも意識的に行った。

「核の科学」の授業が軌道に乗った以後も、新しい担当者を迎えたときに会員に授業内容を研究会で発表してもらったり、各年度ごとの担当者の調整や「核の科学」の成績評価の検討を行ったり、教科書の改訂版を出版する際には教科書の編集に向けた勉強会や編集作業を行うなど、現在に至るまで継続的に活動をしている。

また、毎回担当者が代わる授業を円滑に実施するために、世話人が

- ①前年度の終わり頃に担当者の確認と担当日の調整
- ②大学生協での教科書販売の手配
- ③最初の講義で、受講者数の調整、オリエンテーション、プレテストの実施など
- ④通常の講義で、担当者への連絡、ビデオプロジェクターなどの必要機器の準備
- ⑤最終回の講義で、まとめのテストおよびポストテストの実施
- ⑥各担当者が提出した成績評価の集計

などのサポートを行っている。

6. 成果と評価

(1) 受講者数

受講者数については、2000年度以降は100名程度に収まっている（これは臨時増の学生定員を返上したため琉球大学の募集学生定員が減少したためと思われる）が、それ以前は教室の収容人員（124名）を超えるほどの受講希望者が殺到し、一部受講を断ることが多かった。したがって、19年間での受講者数の総計は正確に集計していないが、2000名を超えている。

このことは、「核の科学」の授業内容が学生にも積極的に受け止められていることを示している。

(2) プレ・ポストテストの結果

プレ・ポストテストの結果から、受講学生の核や平和問題に対する知識や関心が格段に高まっていることが明確になっている。また、細かく検討すると、

インドやパキスタンが地下核実験を実施した（1998年）直後に、核戦争勃発の危険性が高いと感じる学生が増えた。

東海村JCO臨界事故（1999年9月、1999年度の「核の科学」の授業終了後）の翌年、原子力発電を不要と考える学生が急増した。

2000年に日米核密約の存在が明らかにされたときに、非核三原則は守られていないと考える学生が急増して90%を超えた。

など、学生の意識や関心の度合いがその時々の核や平和を巡る国際情勢や事件などを敏感に反映していることが明かとなっている（文末のグラフ参照）。

7. まとめ

「核の科学」は1984年に開設して以来今年で19年になる。この間担当者はかなり入れ替わってきているが、この間特にトラブルもなく毎年100名を超える学生に対して平和教育を行ってきた。受講者の総計は2000名を超えている。これだけ長期にわたって100名規模の総合科目を維持している例はそう多くはないと自負している。

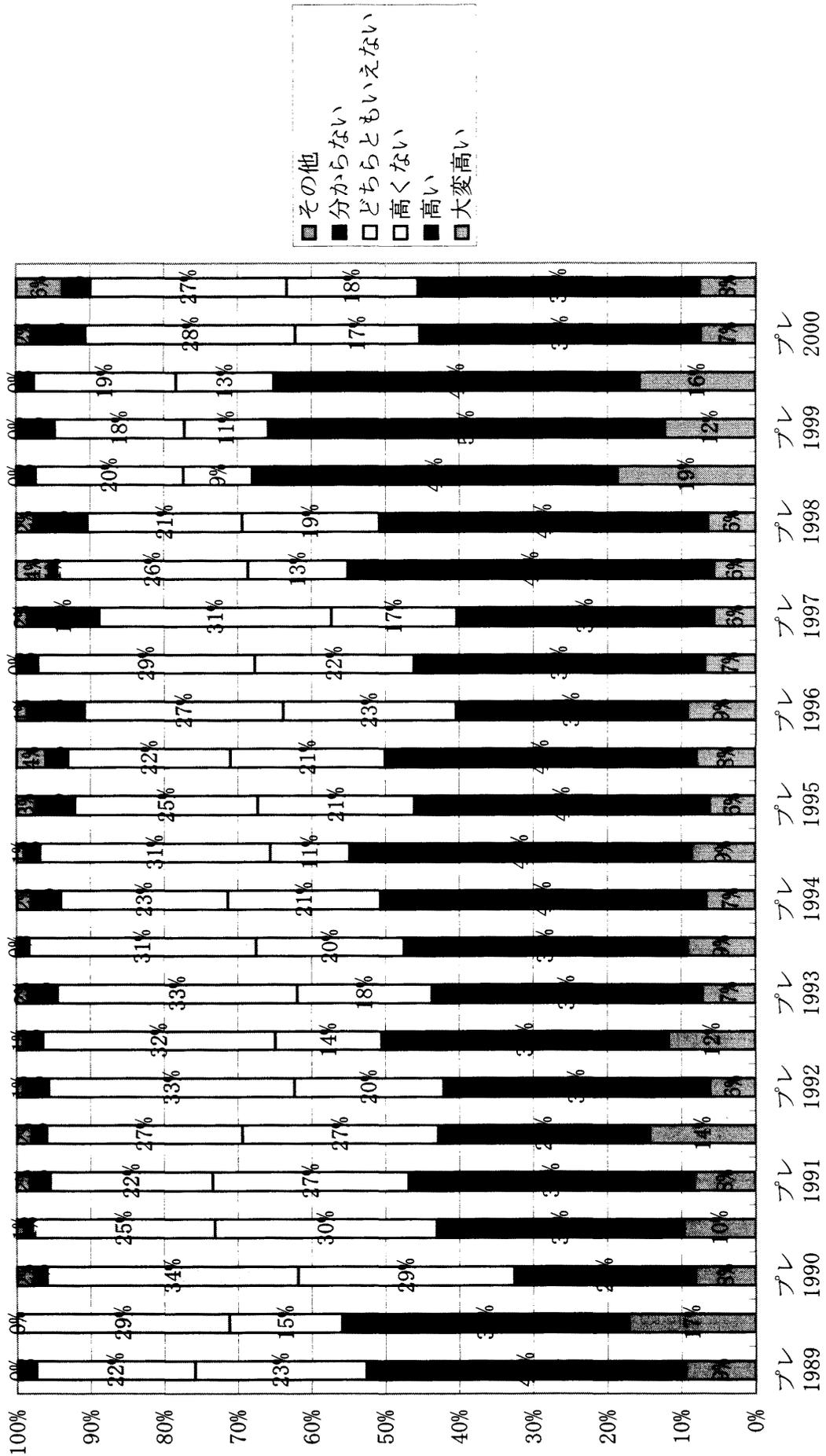
この取り組みを支えてきた要因として、

①教材研究会を組織して、研究会の活動として「核の科学」を提供している

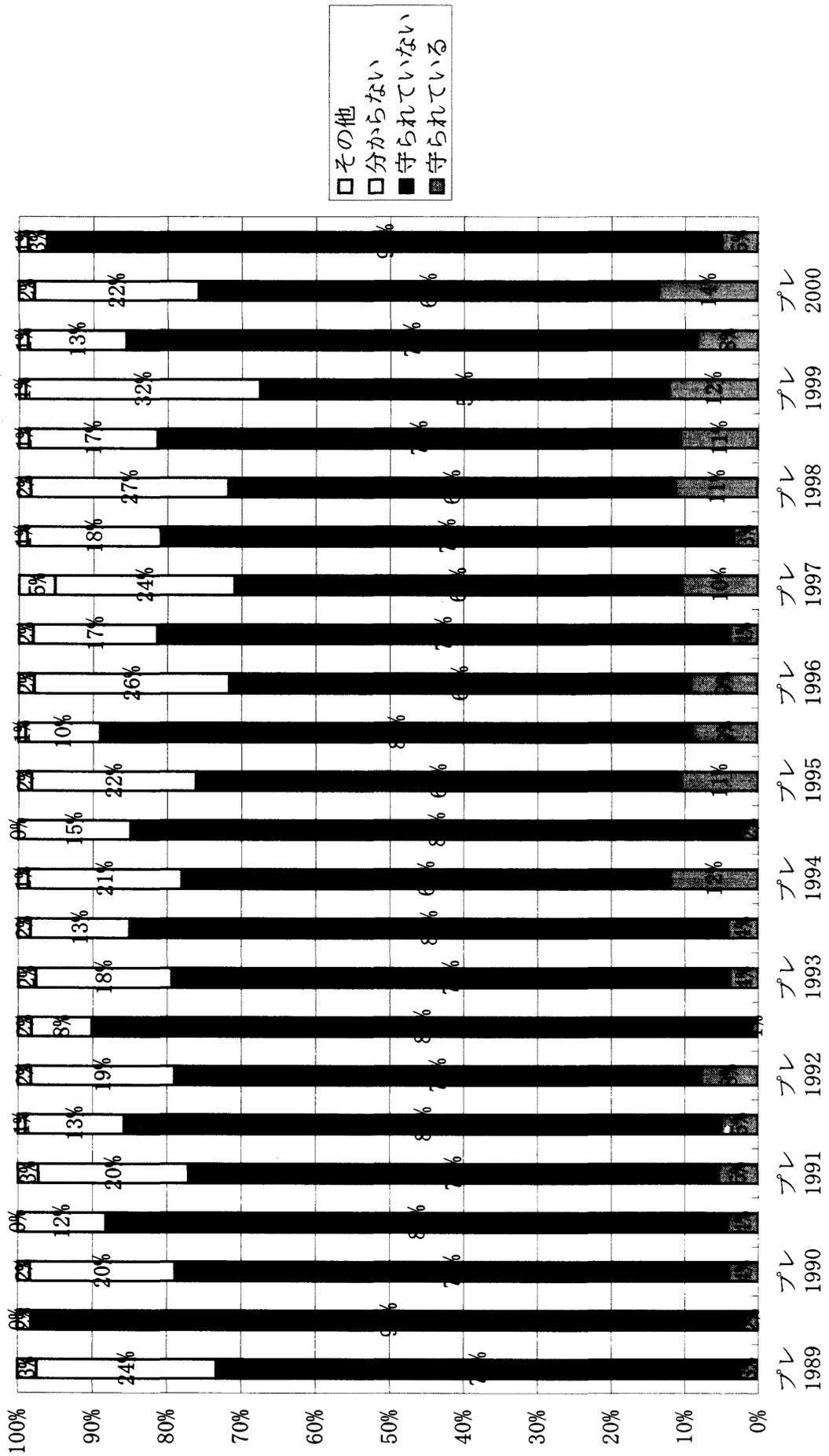
②世話人を数人おいて、毎回の講義の世話をしている

があると考えている。

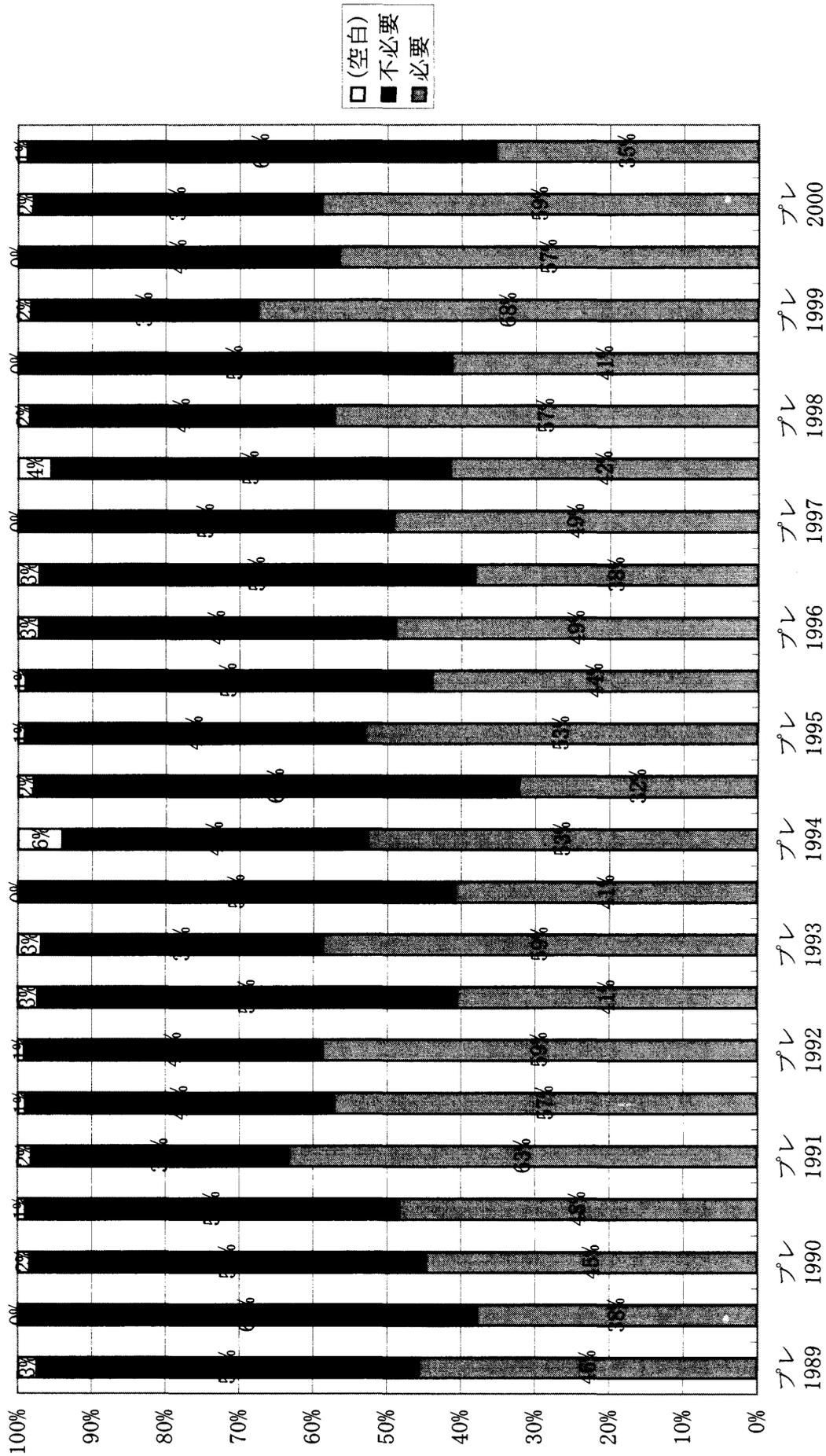
プレ・ポストテラスト集計1 核戦争勃発の危険性について



プレ・ポストテスト集計2 非核3原則は守られているか



プレ・ポストテスト集計3 原子力発電について



特別セッション報告

琉球大学 玉城 勲

特別セッション（琉球大学総合・琉大特色科目）では、以下の2つの発表が行われた。

(1) 仲地博先生（琉球大学「琉大特色科目のコンセプト 大学の理念は共通教育で」

琉球大学は、教養教育をその性質から、「大学卒として持つべき教養の教育」と「専門家として持つべき教養の教育」に分類し、前者をさらに、「大学の普遍的理念に基づく教養教育」と「個別大学が建学の精神等により持つ理念に基づく教養教育」に分類した経緯がある。最後のものが琉大特色科目である。琉大特色科目は、①「自由と平等」、「寛容と平和」を考える教育、②地域に根ざした教育、③国際化に対応する教育、④「熱帯、亜熱帯、海洋、島嶼」を考える教育、の科目から成っている。科目数は29科目、クラス数は37クラスで、昨年度の受講者数の合計は2722名であった。1クラスあたり数は74名で、教養科目の受講者数としては多くも少なくもない。

琉大特色科目の課題としては三点ある。第一点は、琉大特色科目の意義が学生や教官に必ずしも周知されておらず、例えば国際化にかかわる科目がなぜ琉大特色科目に位置づけられているかが理解されていないことがあることである。第二点は、せっかく琉大特色科目として開設しても、担当できる教官が移動等によりいなくなって、開講されないままになっているものがあることである。第三点は、琉大特色科目としての位置づけが可能な科目が他の領域に分類されているものがあり、琉大特色科目に分類すべきではないかを検討する必要があることである。

以上、琉球大学の理念に基づく教養教育としての琉大特色科目について、その意義、現状、課題について報告がなされた。

(2) 堺英二郎先生（琉球大学）「琉球大学における平和教育『核の科学』の約20年間の実践について」

琉球大学では、1989年度から「核の科学」という科目で平和教育を行っており、今年で19年目になる。担当者の専門は、理学、工学、医学、法学、行政学、経済学、教育学と広範囲にわたり、核問題を中心とした総合的な平和教育になっている。講義内容は、開設当時は自然科学を重視していたが、核の問題を平和という問題全体の中で位置づけることがますます必要になっていくということから、現在は社会科学を重視するものとなっている。今年度の講義内容は「核の原理」、「核開発の歴史」、「平和の創造」、「原子力発電について」、「広島・長崎の被爆者と原水禁運動」、「核兵器体系」、「沖縄における非核自治体宣言」、「憲法と非核行政」、「新段階の核軍縮と軍産複合体」、「世界のエネルギー政策と自然エネルギーの開発」、「戦争・原爆の追体験」、「核と環境」、「沖縄の平和と自治」等である。

オムニバス形式で、しかも担当者の専門が多様であるにもかかわらず、19年間も続けてこれたのは、沖縄が悲惨な太平洋戦争を経験し、現在も広大な米軍基地が存在するということからする平和教育への使命感を背景に、担当者全員で教材研究を行い、教科書を独自に刊行してきたことによる。教科書は今年度、第三版を出版した。

「核の科学」では、受講した学生の核や平和に関する意識や知識を問う、まったく同じ設問でのアンケートを最初の授業と最後の授業に行っている。それによると、学生の意識や関心の度合いはその時々を巡る国際情勢や事件等を敏感に反映しているものの、最初の授業のアンケートの結果と最後の授業のそれとの比較から、学生の核や平和に関する意識や関心がより深まっていることが読み取れ、「核の科学」がそれなりの学習効果をあげていることがわかる。

以上、琉大特色科目の中の「核の科学」について、実践報告が行われた。

各報告に対して出席者から質疑や意見が出された。(1)に対しては、担当できる教官がいなくなって開講されないままになっている科目があるということについて、他の教官が替わって担当することはできないのか、との質問があったが、それは困難なこともある、との応答がなされた。また、琉大特色科目に限らず一般的な問題として、教育内容の改善についてどのような工夫がなされているか、という質問があったが、これに対して、琉球大学では1994年から全学的に授業評価アンケートを行っていること、しかし、これまでのところ、その結果は担当教官が授業改善に役立てるために利用するのみで公表はしていないこと、各学科専攻で年2回行われる指導教官と学生の懇談会では学生の側から個々の授業に対する不満が出されることもあり、その場合は対処していること、等の応答がなされた。また、出席者から、琉大特色科目の昨年度の受講者が2722名であるということは、琉球大学のほとんどの学生が受講していると見ることができるので、成功しているといっただいではないか、との感想がのべられた。

(2)に対しては、長崎においても同じような平和教育を行っているが、他の教官から、もうやらなくてもよいのではないかという声も聞かれるが、琉球大学ではどうか、との質問があったが、琉球大学ではそのようなことはまったくなく、全学的に理解されているとの応答がなされた。また、「核の科学」に関して何か問題点はないか、との質問に対しては、問題点はなく、むしろ、より充実した授業にするために通年にしたいとも考えているが、世話人の負担も大きくなるので難しい、との応答がなされた。

質疑応答は割りと活発になされた。大学の個性化の時代を迎えて、このような特別セッションを設けたこともそれなりに意義があったように思う。